

第67図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(7)

大浦C遺跡の場合は館を区画する堀の底からの出土であった。堀の上面からは岸窯の製品が出土しており、17世紀中葉より以前に位置づけられる。また出土例が伊達領内に限定されることが知られており、上杉入部前と想定したい。

B群3類（第67図5・6）

外面をミガキ調整によって仕上げた小型壺形土器である。両者とも底部が欠損しており、全体は不明である。内耳土堀と共存することから伊達時代といえる。2点出土している。

B群4類（第67図8・9）

破片であるが2点出土している。8は口縁部片で外面を黒漆で下塗りし、赤漆で文様を描いているのに対して、内面は素焼のままである。9は底部の脚部と考えられる破片である。漆塗ではないので8と9は接合しない破片と理解したい。

B群5類（第68図1・2 第71図1・2）

総数で61点出土し、破片で占められる。形態は器高が高いタイプと器高が低いタイプの2形態がある。前者としては第681・第71図1の手焙、後者は第68図2・第71図2の焙烙に細別される。手焙破片として39点、焙烙の破片は22点であった。手焙は暖房具である。一方の焙烙は内耳を有する形態の出土例があり、堀としての用途が相当である。B群2類に先行する形態として注目される。出土場所は米沢城跡のIV次調査地点である。

B群6類（第68図3・4 第69図1～3・6）

筒形を呈する第68図4・第69図1・第69図1・6が認められる。筒形は火消し壺の用途を有すると考えられる。破片の合計もわずか3点で少量の出土状況である。

B群7類（第68図3）

4点の破片が認められ、1点だけ図化することができた。胴上部の破片であり、外面をハケメ調整と指押しによって整形している。外面は横位のナデ調整及び指押しを施している。B群6類と同様な用途が推測される。

B群8類（第69図5 第70図1）

破片であるが26点出土している。大半が胴部破片であり、器形を想定できたのは、第70図1の1点だけである。第69図5は底部片であり、大型の器形が想定される。貯蔵用の大型壺形土器であり、内耳土堀と併行する年代である。

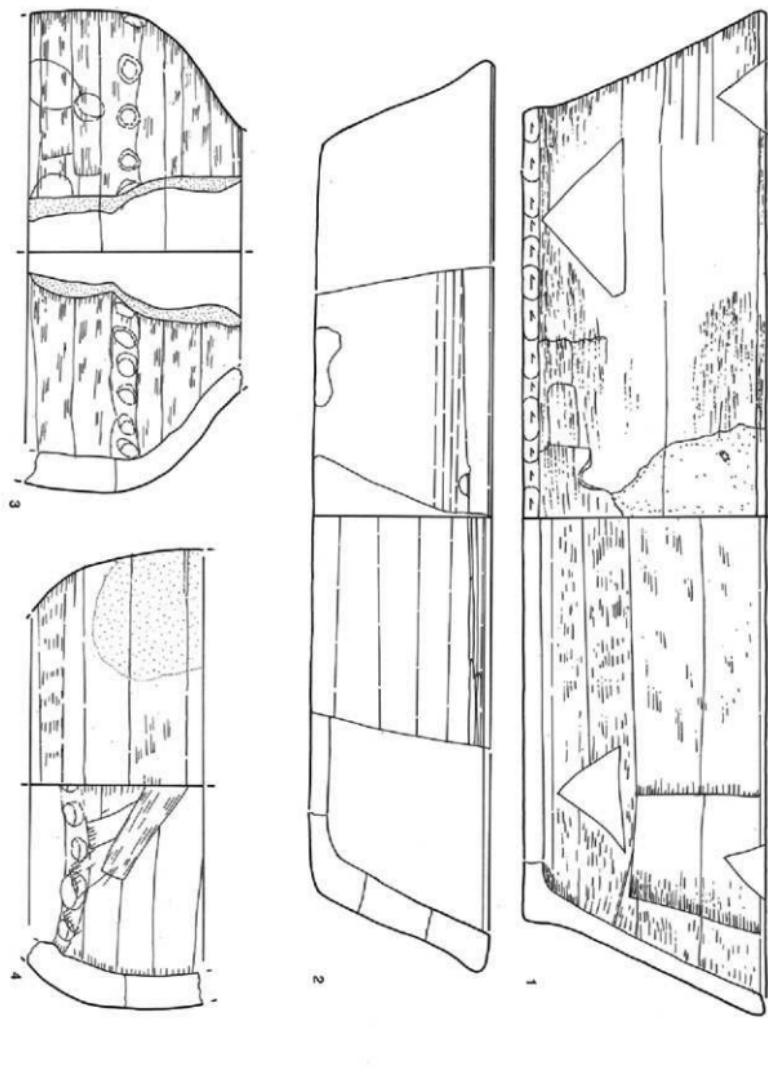
B群9類（第70図2）

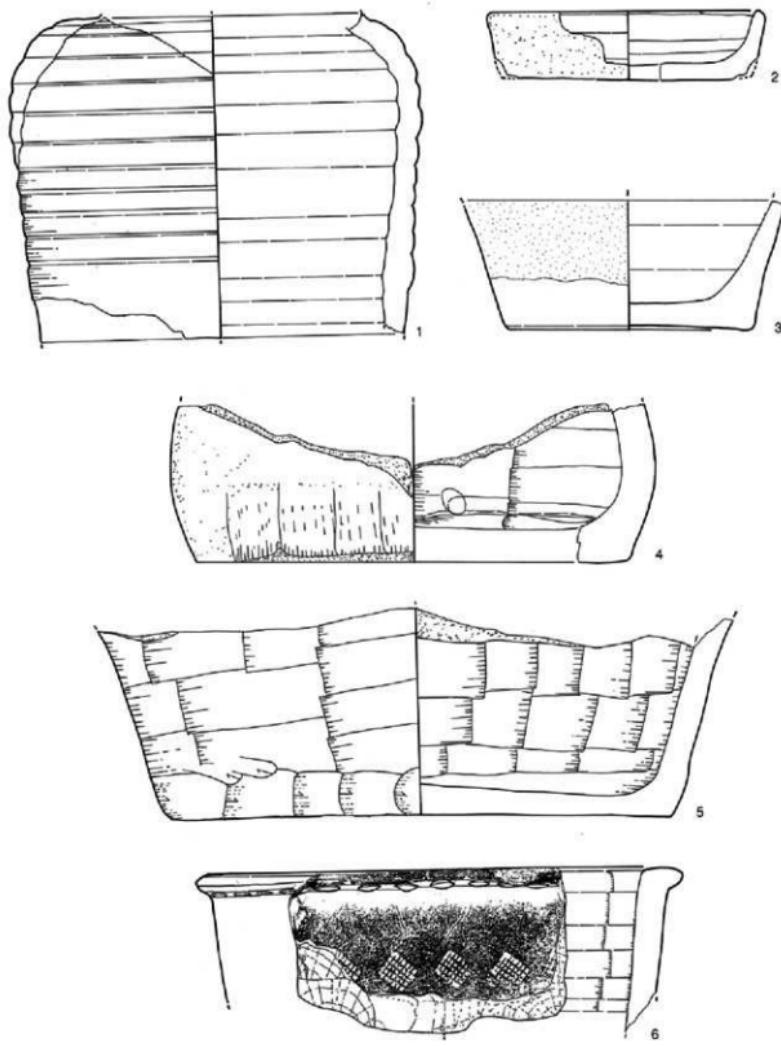
口縁部と底部を欠損する大型の壺形土器と想定される。外面を斜位・横位・縦位のヘラナデで丹念に仕上げている。内面には漆を何回も塗り重ねた仕上がりである。外面・内面の調整から判断して、特別に製作された壺形土器であるといえよう。

B群10類（第70図3 第71図3）

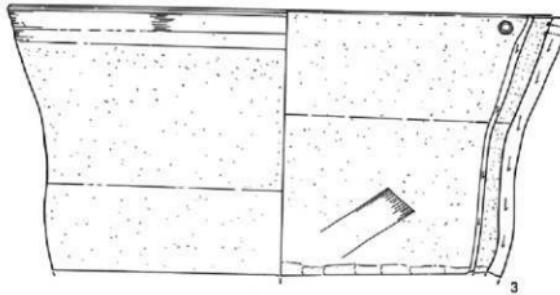
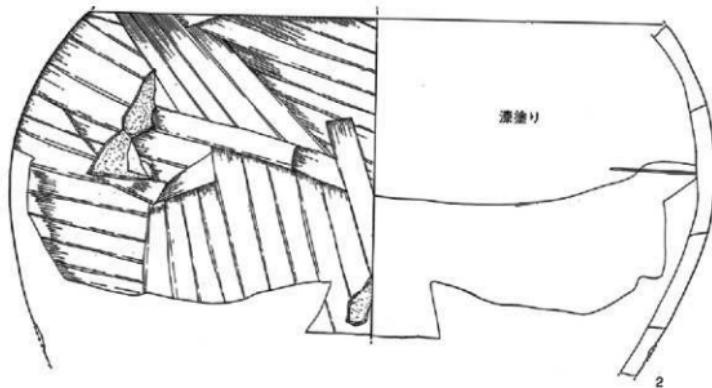
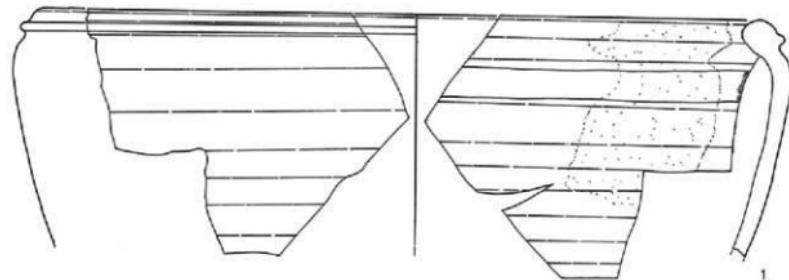
七厘であり、2点出土している。第70図は内耳土堀の形態と類似するが、一部削り取って空間を設置している。第71図3は筒形に突器部を整形した形態を有し、底面に3個の脚部を持つ。器面は厚く整形され、現代の七厘に通じるものがある。KY5からの出土であり、今回検出された礎石建物に併行する年代と考えられる。

第58図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (8)



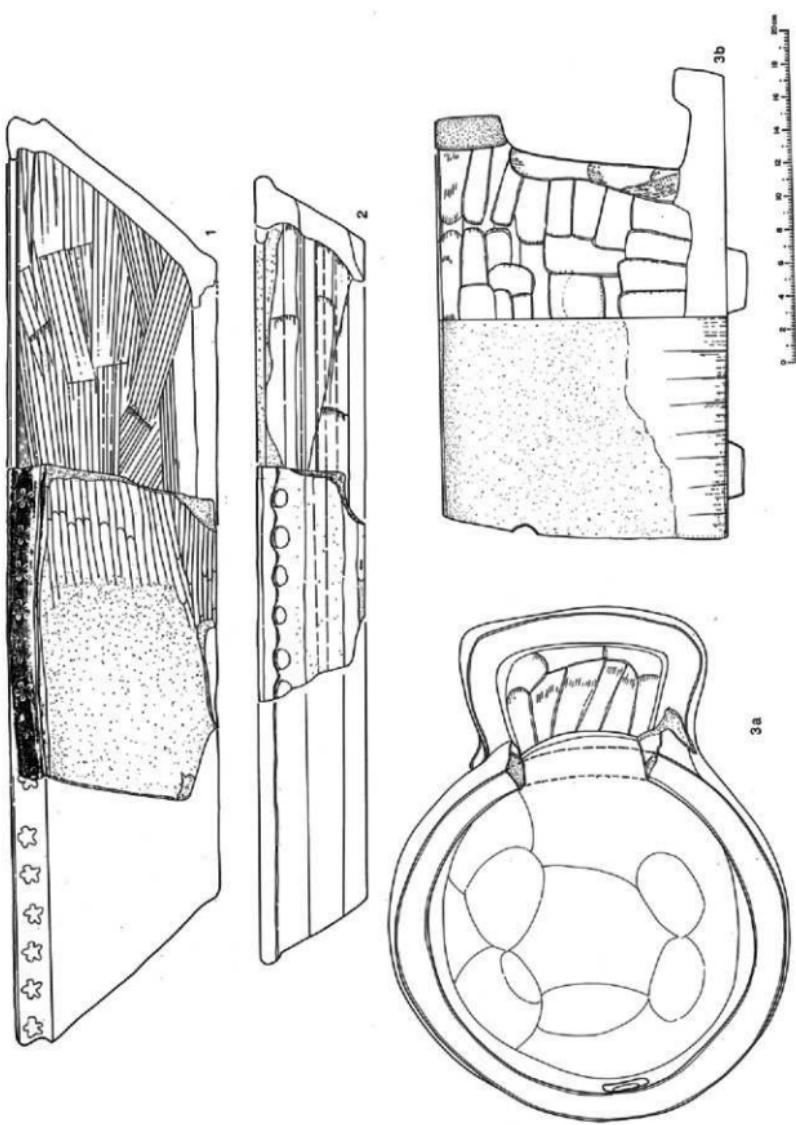


第69図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図（9）



第70図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (10)

第71図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (11)



C群（第72図～82図）

今回の調査において出土数が最も多く認められた。その中で国産陶磁器は3,151点、輸入陶磁器は73点であった。それらを観察できた範囲で述べると下記のようになる。まず焼成窯別に見てみると唐津4点、岸窯10点、瀬戸48点、成島17点、十王1点、相馬18点、伊万里8点、肥前15点、信楽焼1点、志野9点、京焼2点、清水焼1点、在地窯2点、本郷2点、越前1点、景德鎮10点、漳州窯1点、古九谷1点。これは実測図を作成できたものについての数である。

全体的に見ると伊万里系・瀬戸・肥前系・大堀相馬が7割を占めた。以外と本市の成島焼が少ない出土状況であった。器形から16形態に細別した。C群1類（壺形を一括）108点、C群5類（香炉）10点、C群6類（皿類）553点、C群7類（鉢類）295点、C群8類（灯明皿）17点を数える。

C群9類は（供膳具）16点、C群10類（蓋類）6点、C群11類（茶碗類）783点、C群12類（化粧道具類）3類、C群13類（植木鉢）5点、C群14類（煙草火入）68点、C群15類（摺鉢）251点、C群16類（雑器類）146点となる。染付のグループは別に説明する。

C群1類（第80図1 第73図2 第83図1 第85図1）

出土した破片は胴部片が多く、図化できたのは4点にすぎない。第72図1・第77図1の両者耳付壺である。第72図1は在地窯の製品と理解され、13世紀末葉から14世紀に位置づけられる伝世品と考えられる。第75図1は成島焼の壺で江戸時代末葉の製品である。この壺を除き、茶壺と想定される。第73図2は信楽焼の製品で外面は黄褐色を呈する。

C群2類（第73図1）

破片としては多数認められたが図化できたものは1点だけであった。第73図1は越前窯大壺であり、口縁部が出土している。他に接合する破片はなく全体は不明であるが、口縁部形態から判断して、大型の器形を有すると想定したい。

C群3類（第74図1・2 第76図1・5）

すべてDY1からの出土で占められ、二次焼成を受けて変色している水差しである。口縁部の形態から第74図1・2は蓋が付随するものと想定される。

C群4類（第84図3 第78図12・13）

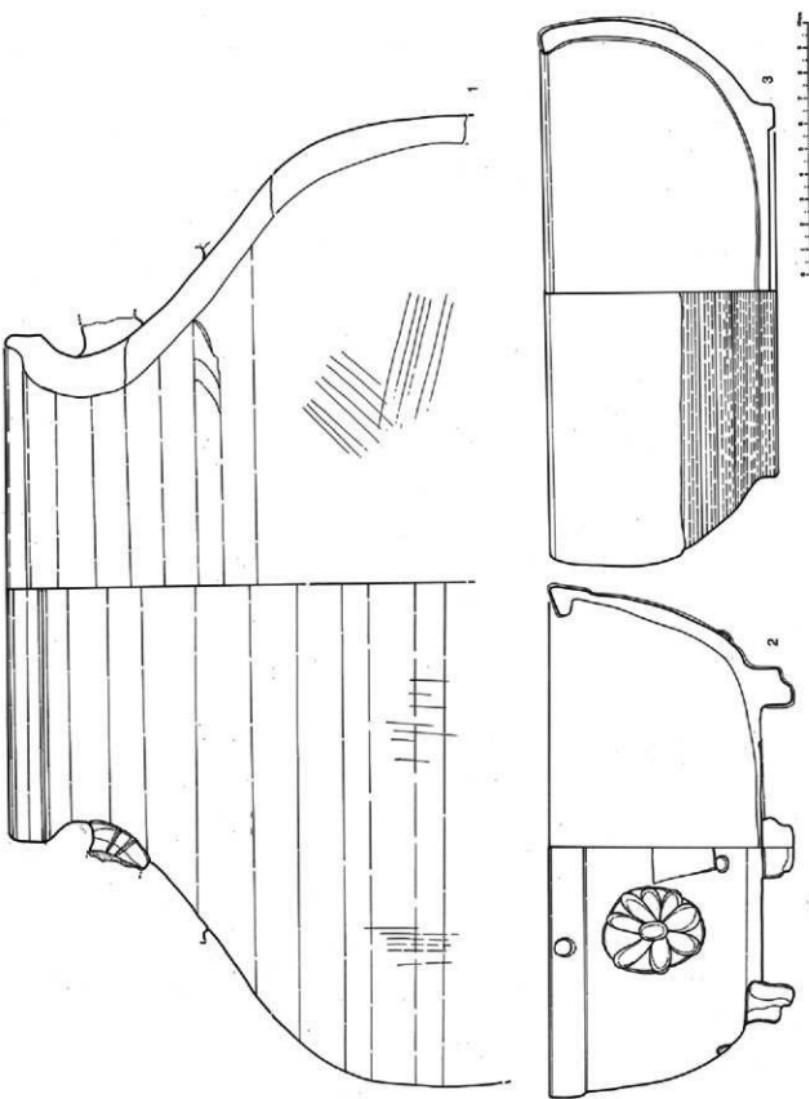
杓たてと想定される第84図3、第78図12は備前焼と考えられる広口壺である。底部を指で押し変形させ、水引の線を意図的に段上に配する整形である。同図13は唐津と李朝の両意見があることを記しておく。抹茶碗と想定される。

C群5類（第72図2 第76図7 第77図5 第81図1・2）

脚部を有するタイプと、平底のタイプの2形態が認められる。外面には釉を全体的にかけ、内面は口縁部だけに釉をかける特徴を有する。第81図で示すように口縁が内曲する形態が香炉と考えられる。出土地がDY1で占められる一括資料であり、18世紀に廃棄された製品である。第76図7は岸窯の製品で(1644年～1648年)であるから17世紀中葉から使用された香炉である。

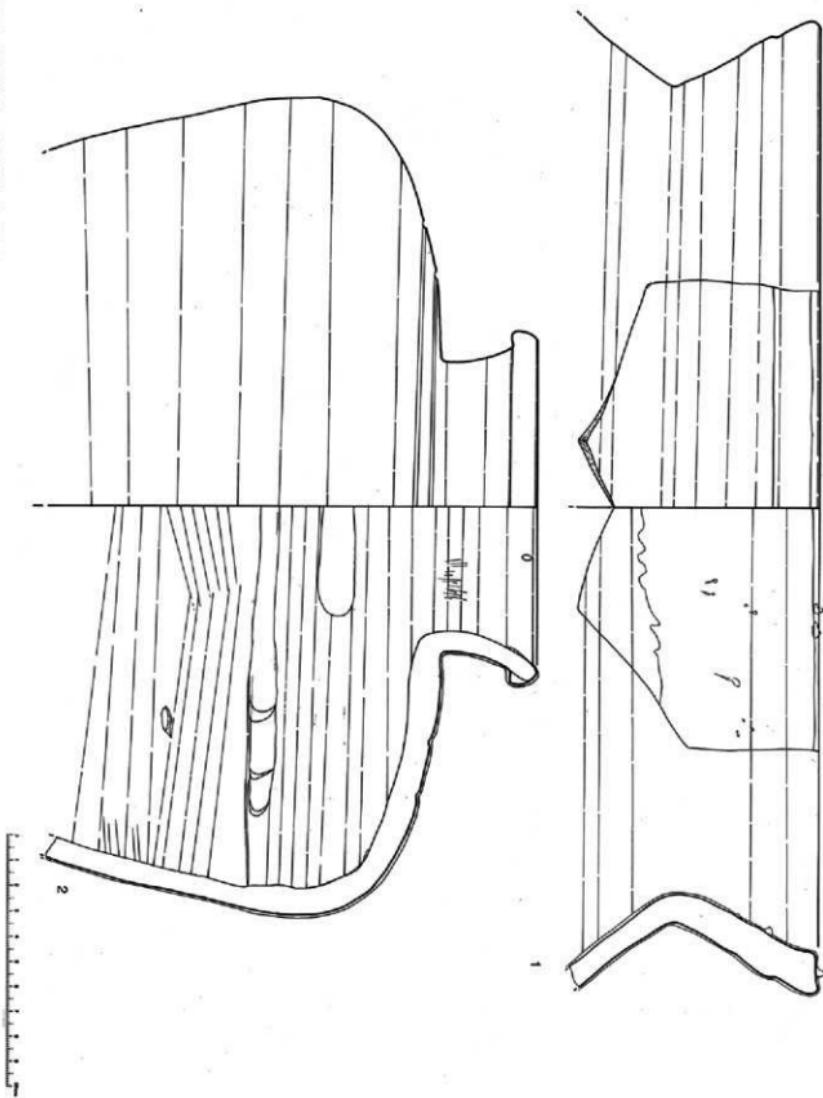
C群6類（第76図5 第77図6・7・9～17 第79図1～9・11・12 第80図）

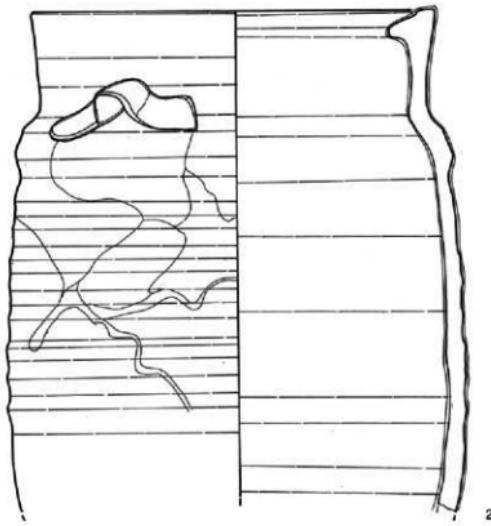
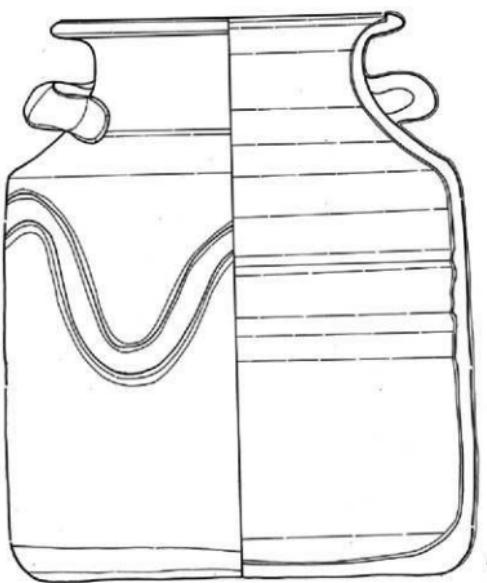
出土数では2番目に多い器形であり、食器類として使用されたものや、供膳具として使用し



第72図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (1)

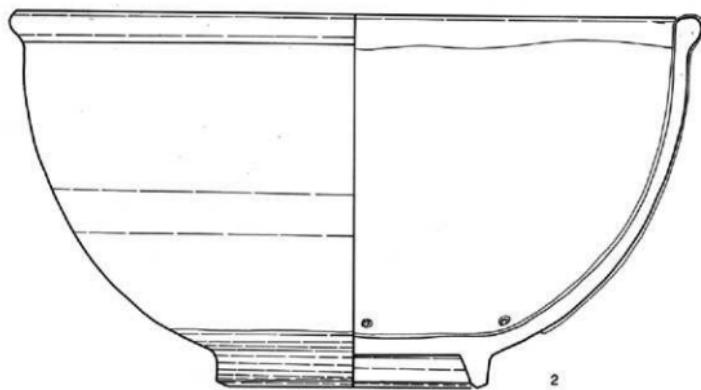
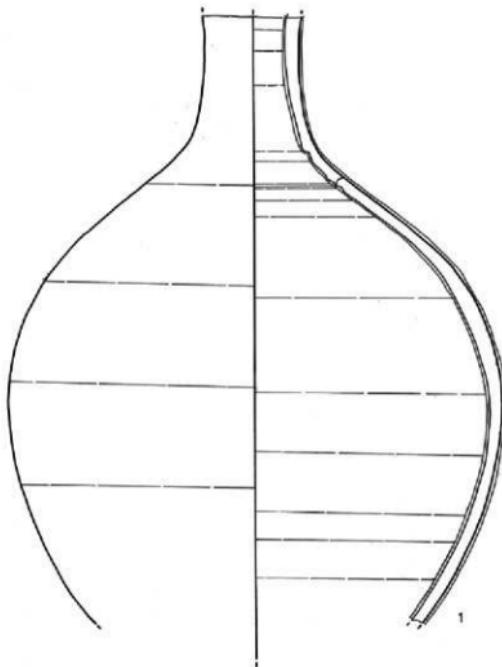
第73図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(2)





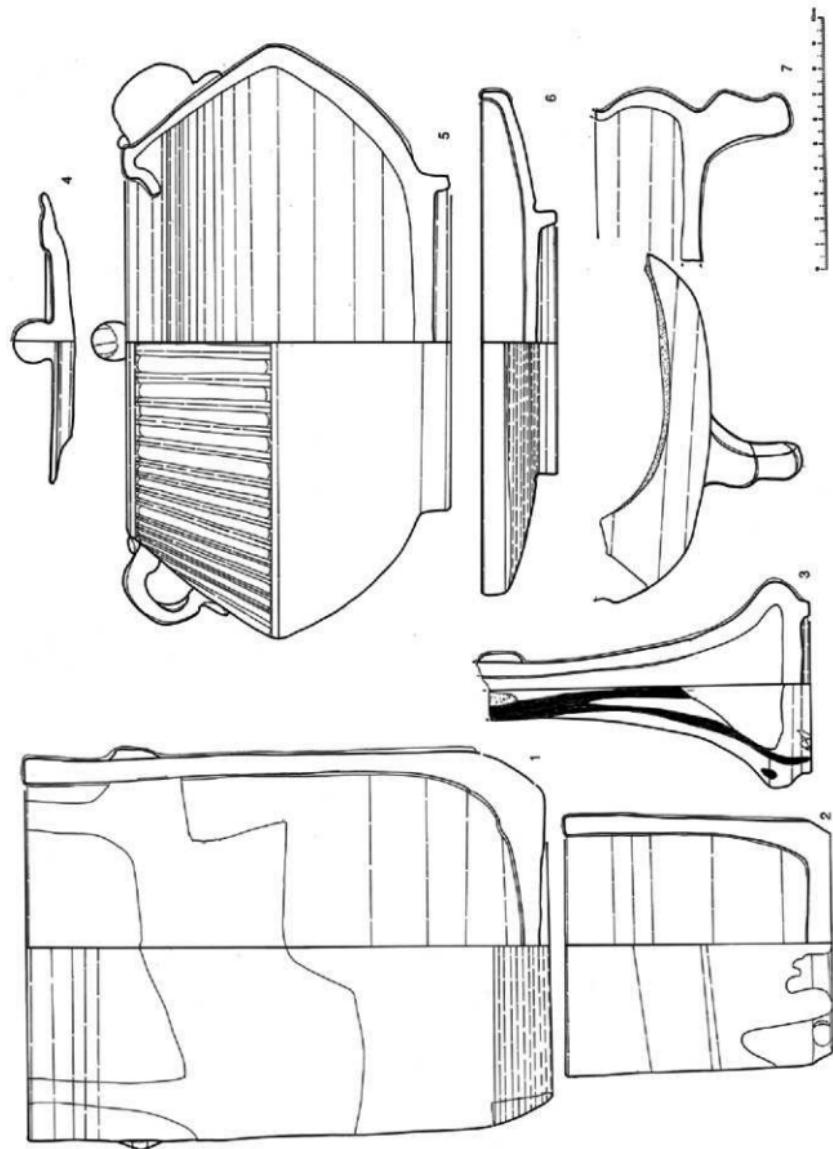
1
2

第74図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(3)



第75図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (4)

第76図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (5)



たものも含まれると推測される。形状から大皿・中皿・小皿に分けるが大半は小皿である。第77図6・7・9～17は花草図を描いた小皿のグループで京焼で考えられ、近世の製品と推測される。第79図1～3・第80図は、菊の印刻を有する瀬戸の小皿で緑黄色を呈する。16世紀前半の製品である。これらの中で第87図11は白磁の小皿で器壁が薄い中国産で15世紀代と推測される。

C群7類（第72図3 第75図2 第77図3・4）

近世に製作された鉢類であり、白鷹町の十王焼の第75図2や他に窯不明第77図4が出土している。同図3は香炉とも推測される器形で瀬戸の製品である。他に第72図3の岸窯の製品も含まれている。出土数の割合には図化できる破片が少なかった。

C類8類（第78図1～6）

内面中央部に舌状の突起部を整形した灯明皿で平底と脚部を有する2形態が認められた。平底の第78図1・2・4・5は岸窯の製品である。他は窯不明といわざるを得ない。

C類9類（第78図7・8）

脚部を有する形態であり、第78図7は金銅製容器を模した器形を有する。大堀相馬の製品であろう。同図8は窯不明である。内面に軸は認められない焼成で、小型の香炉とも考えられる。

C群10類（第78図14・15）

急須の蓋である。水差しの蓋に相当する器形は認められなかった。

C群11類（第82図）

2番目に多い出土数であり、飯碗・茶碗に使用された食器類である。第82図は3～6・8はハケ目碗と呼ばれる形態で口径10cmを測る。現代の飯碗は11～12cmが標準であり、ハケ目碗も飯碗と考えたい。DY1からの一括で出土であった。同図9・10もDY1出土で伊万里絵付茶碗である。17世紀の製品と想定したい。

C群12類（第79図15・17）

紅皿と髪結道具皿の2点が出土している。第79図15は紅皿は瀬戸で19世紀以降に製作された製品である。

C群13類（第85図2・8）

2点は同一個体であり接合する。底部外面に「レリ」とカタカナの文字が見える。中央に穴があいており、植木鉢である。窯は不明である。製作年代はC群12類と同時期であろう。

C群14類（第81図3～10）

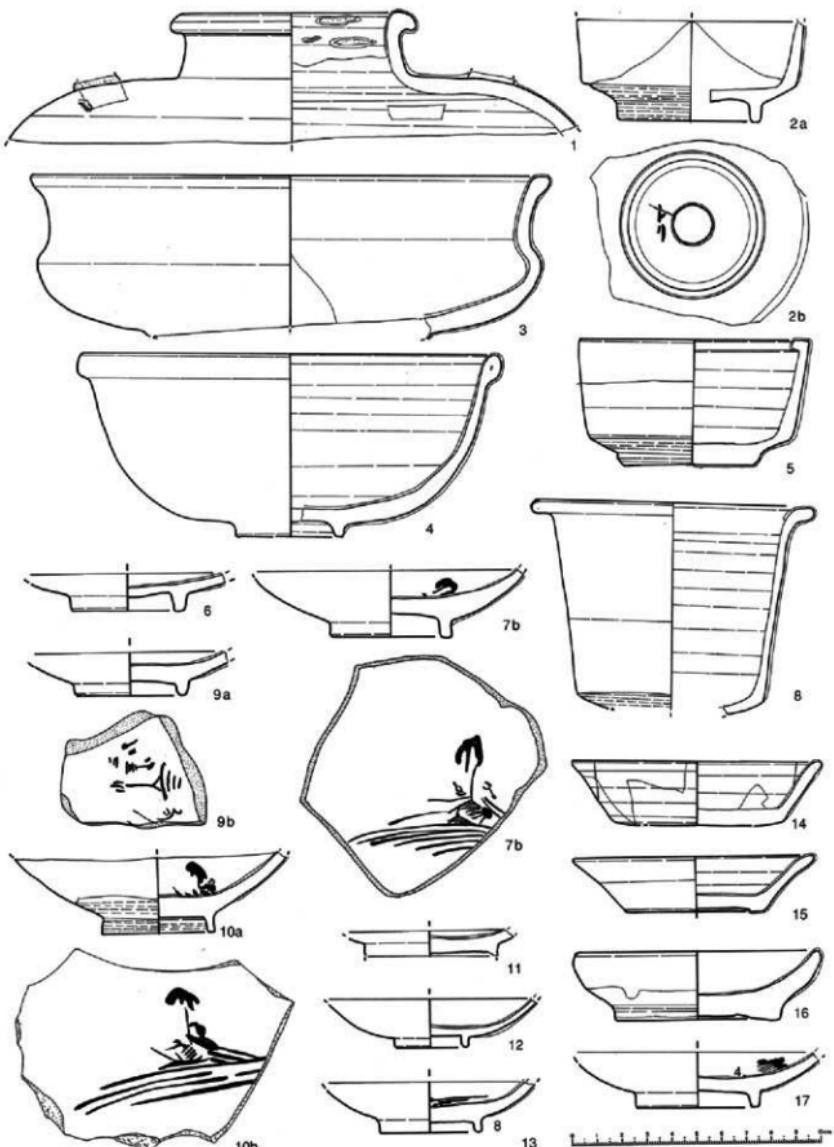
DY1からの出土で占められる。他の共伴する遺物と同様に二次焼成を受けている。破片としては68点、個体数は約30点と推測される。タバコ盆に載せて使用する火入れの容器である。

C群15類

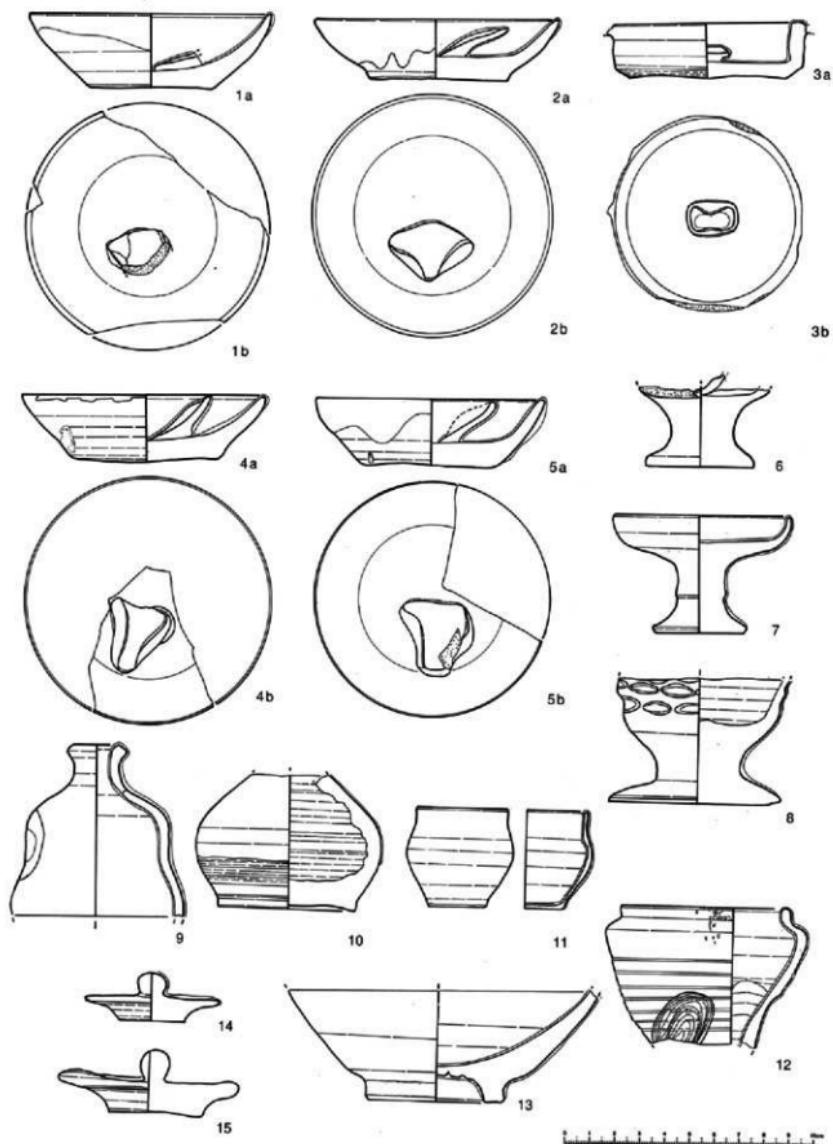
紙面の都合上図示しなかったが、内面の全面にカキ目を有する形態の摺鉢であった。現代とあまり類似する器形である。

C群16類（第78図9・10・11 第79図10・13・14）

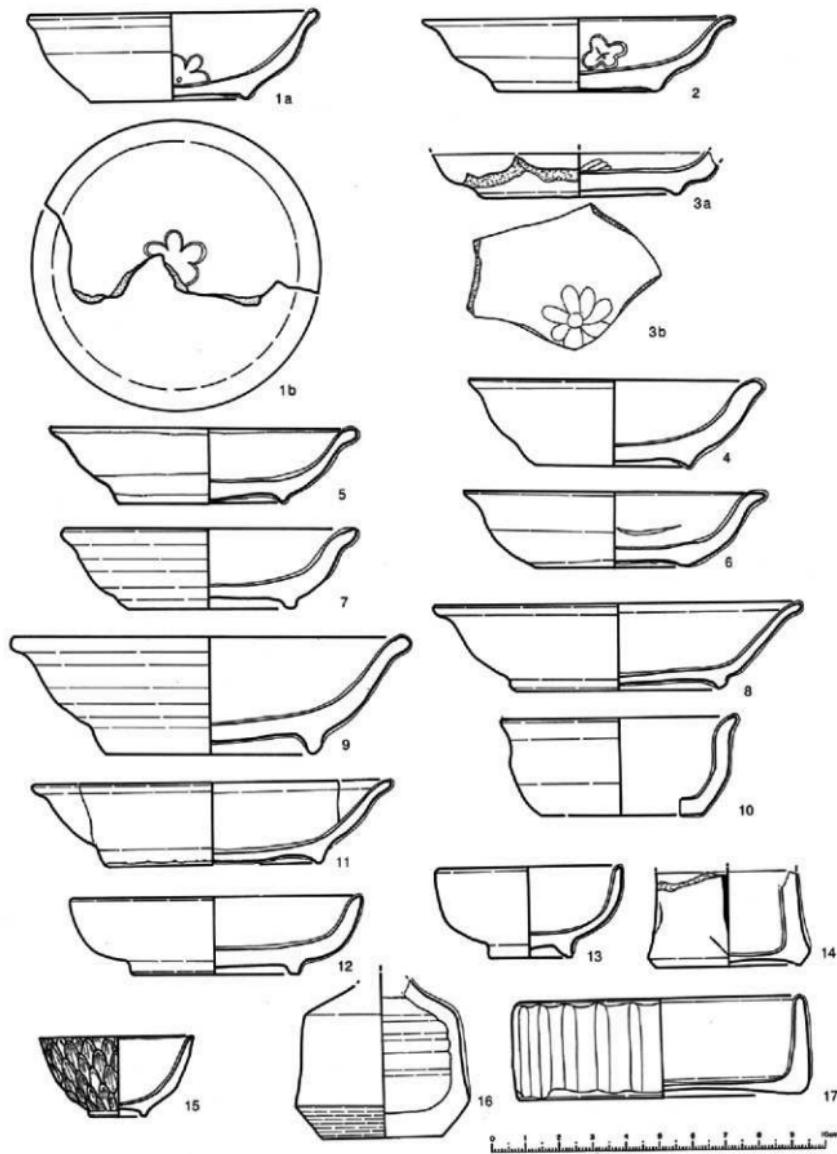
猪口・さかずき・小壺・筒型を有する雑器類である。詳細は観察表を参照願う。



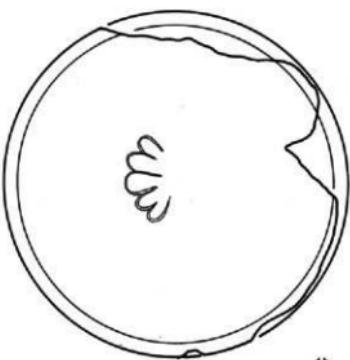
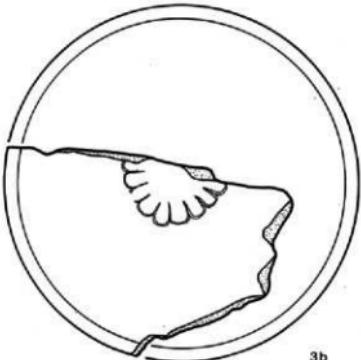
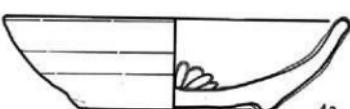
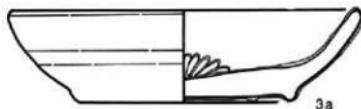
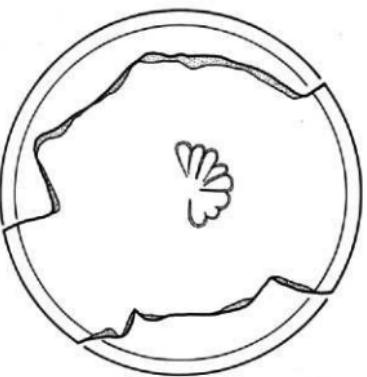
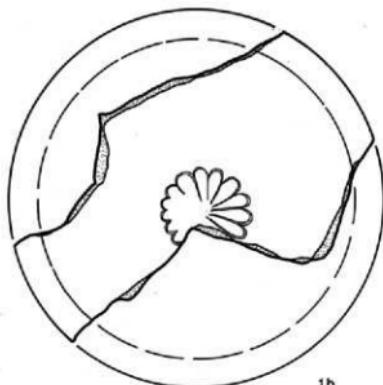
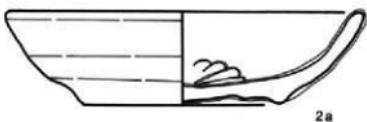
第77図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(6)



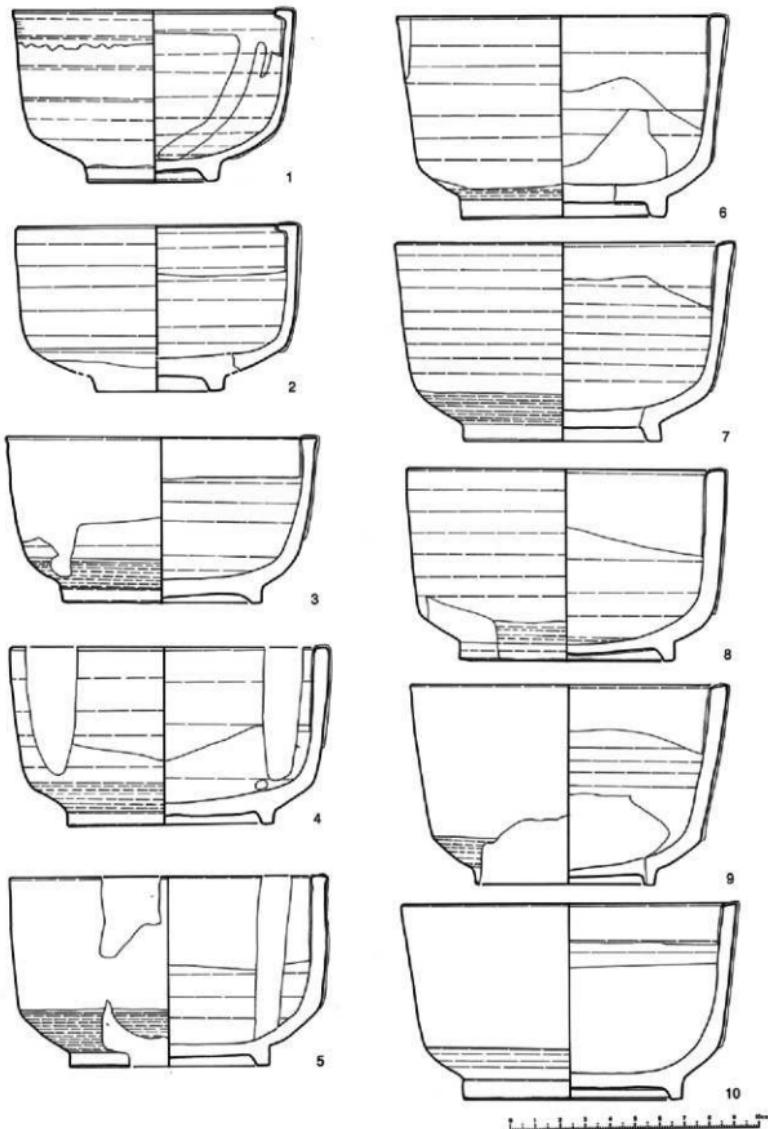
第78図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (7)



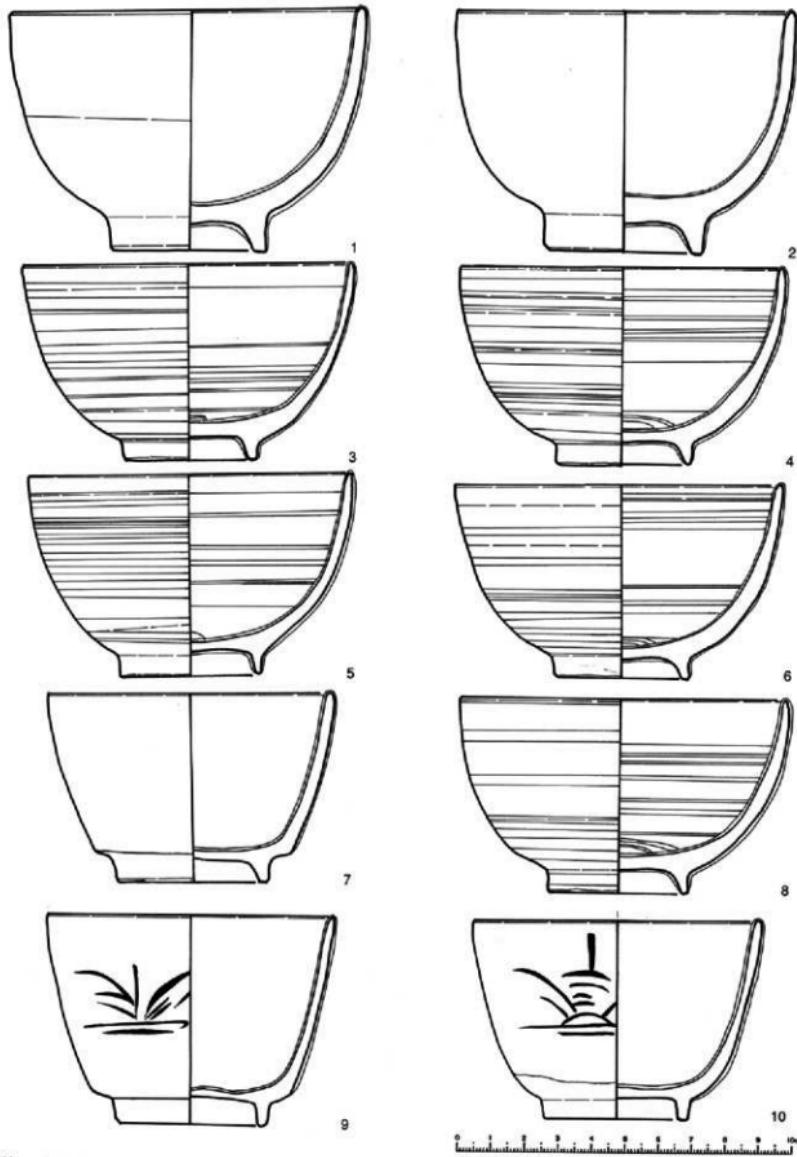
第79図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(8)



第80図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (9)



第81図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (10)



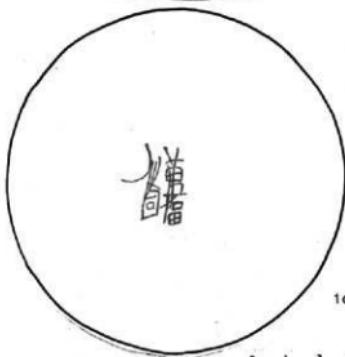
第82図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (11)



1a



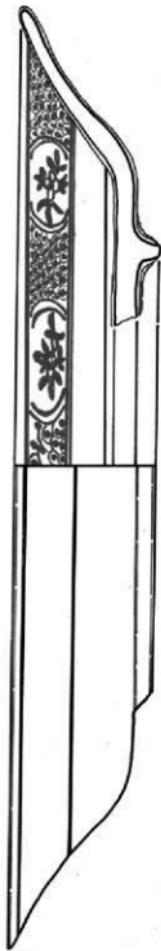
1b



1c



第83図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(1)

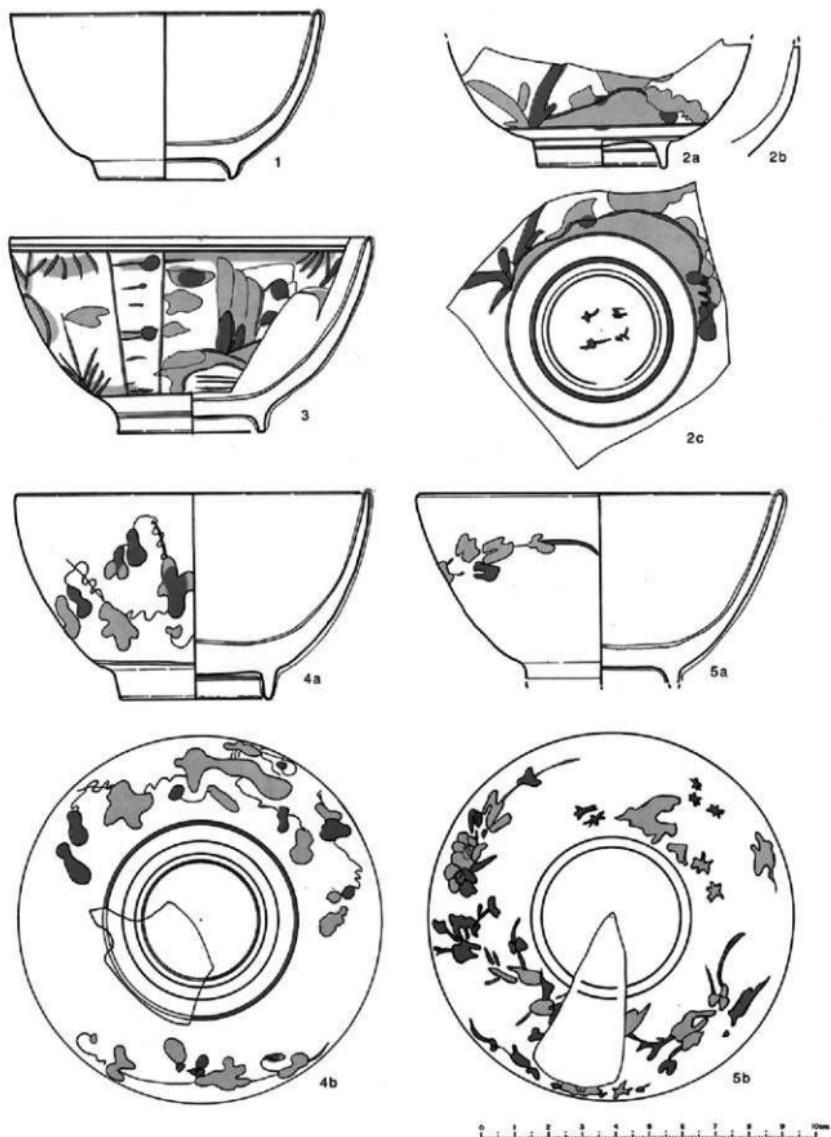


1a

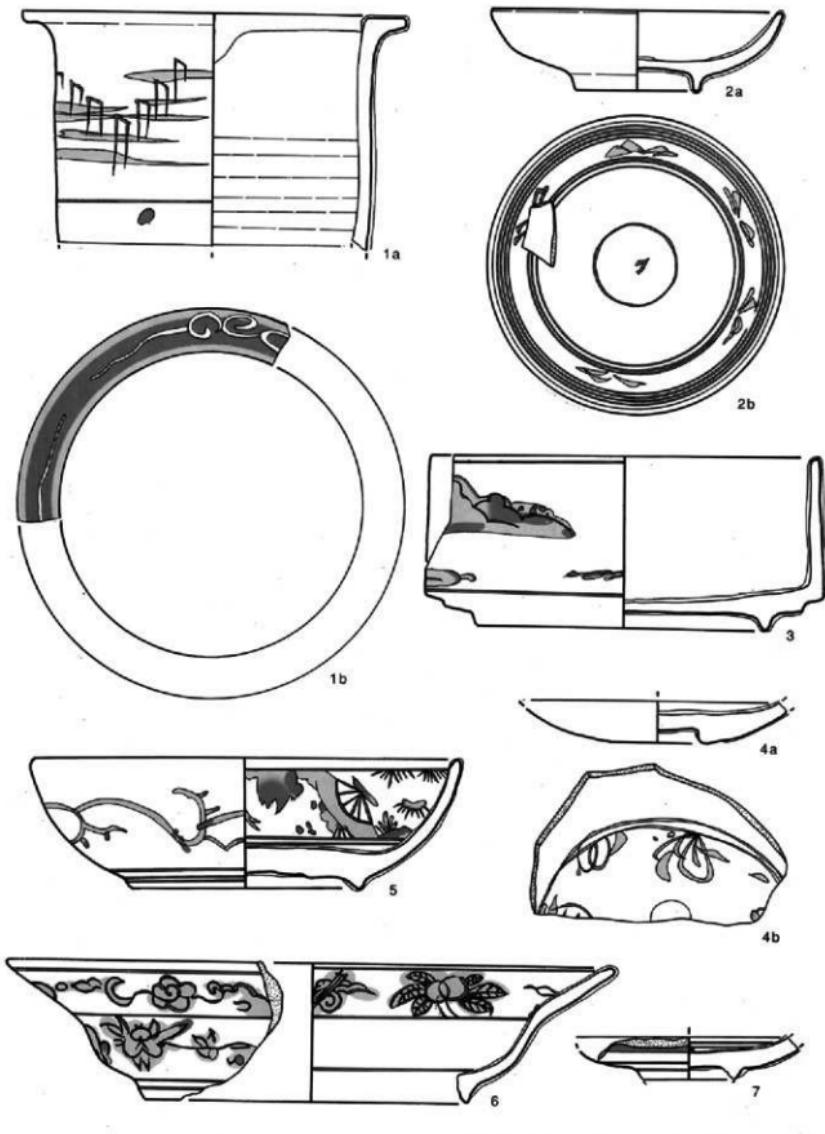


1b

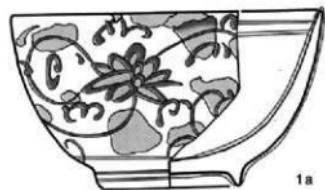
図 84 第 2 回 墓出土遺物測量図 (2)



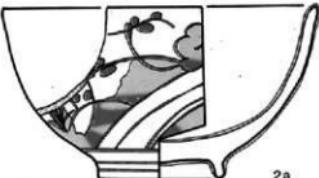
第85図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (3)



第 86 図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (4)



1a



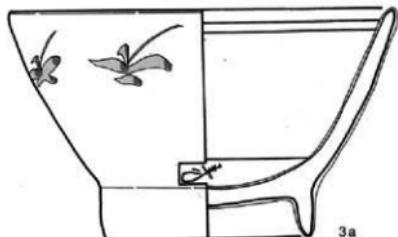
2a



1b



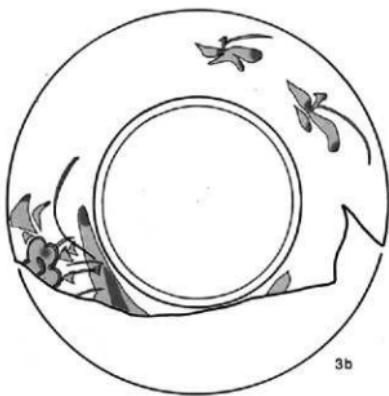
2b



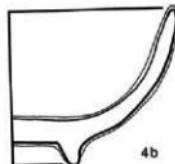
3a



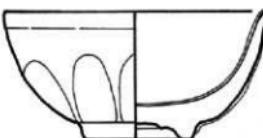
4a



3b



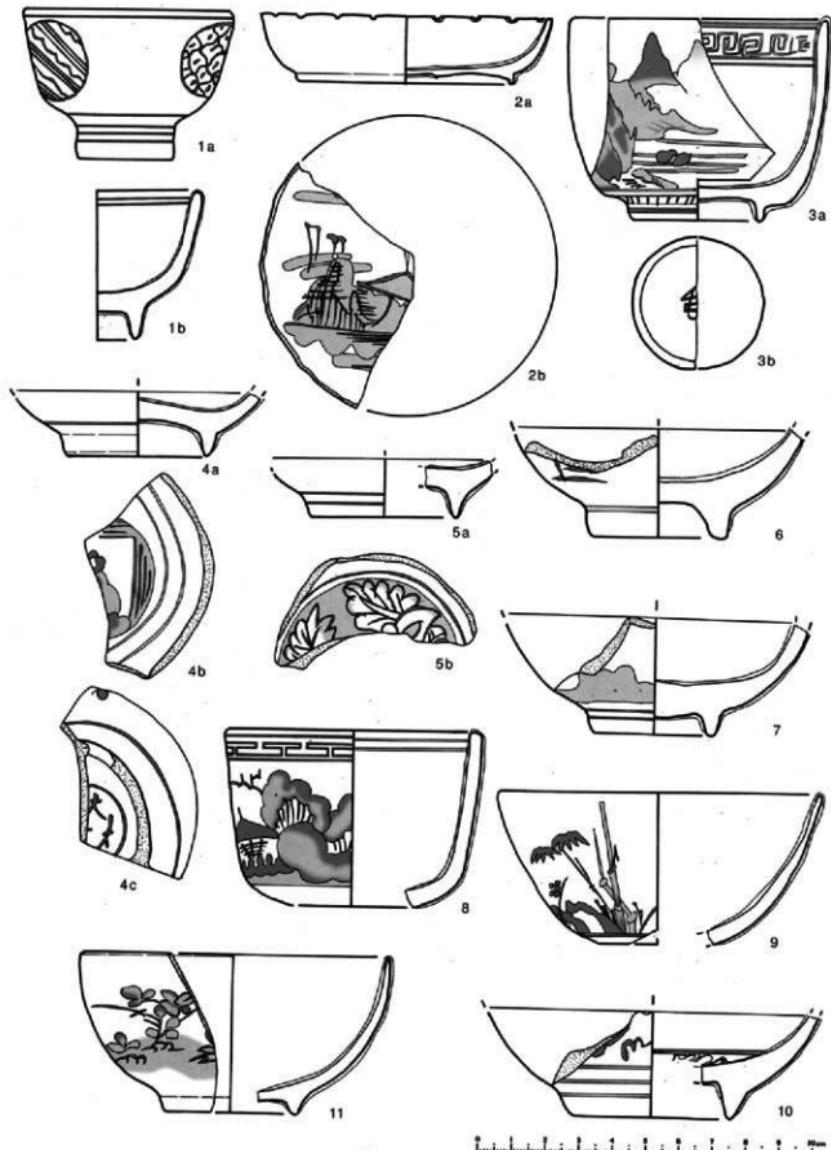
4b



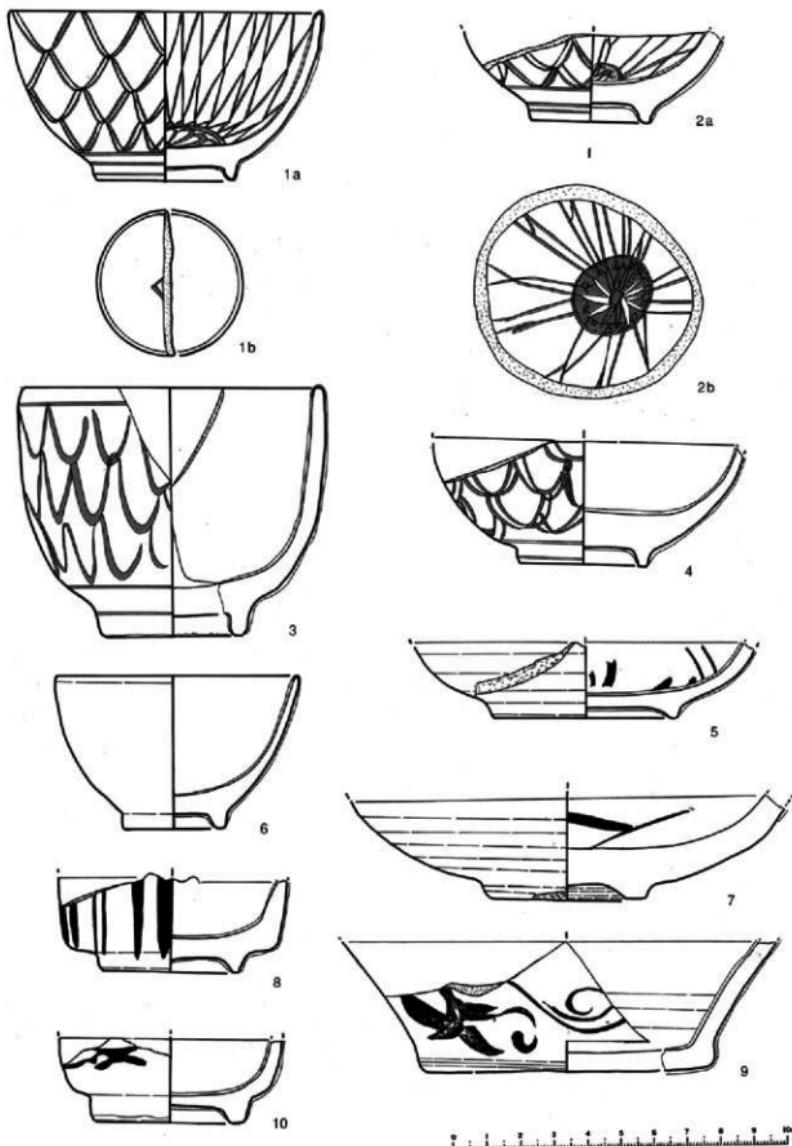
5



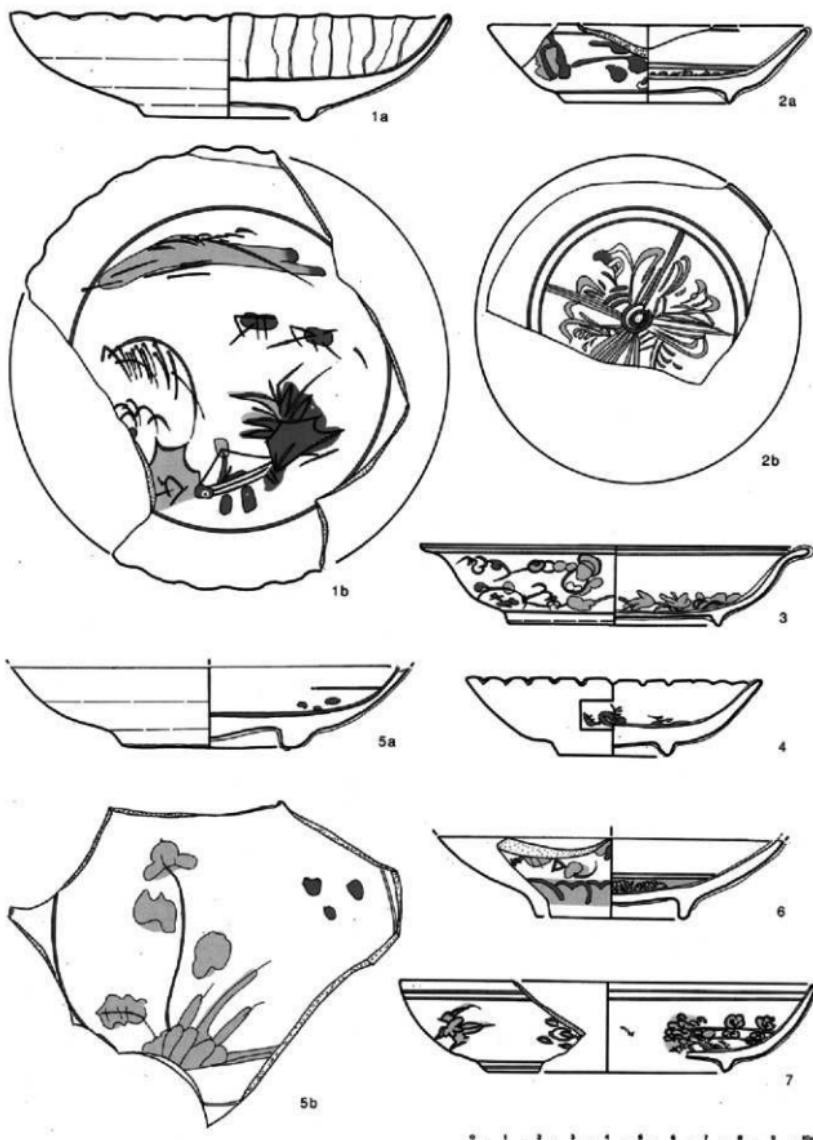
第 87 図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (5)



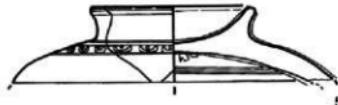
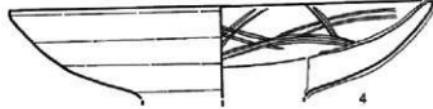
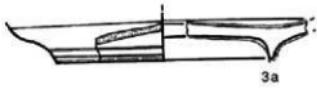
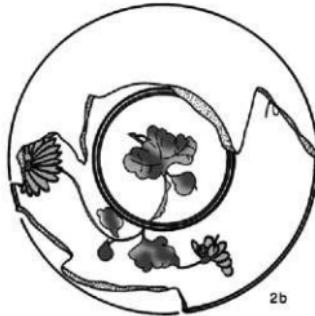
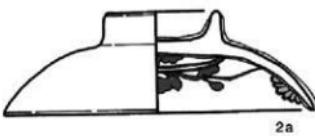
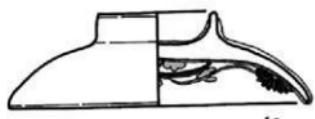
第88図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (6)



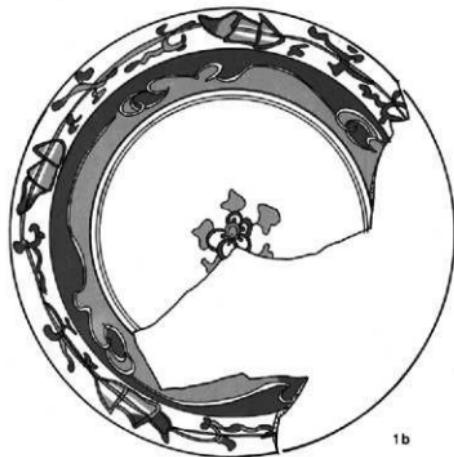
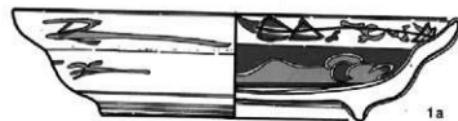
第89図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(7)



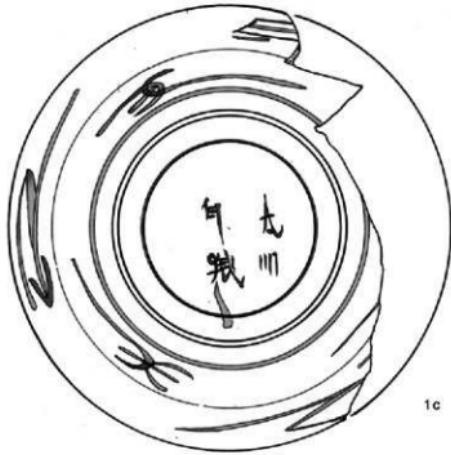
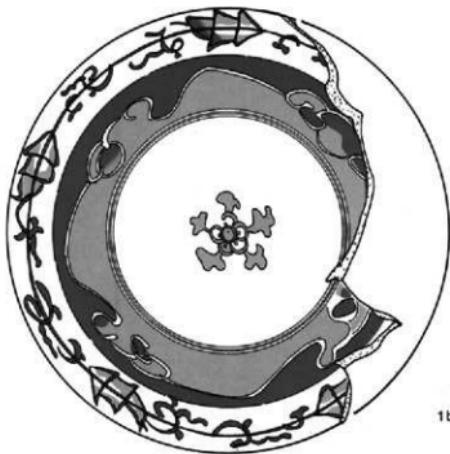
第90図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (8)



第91図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (9)



第92図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (10)



第93図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (11)



1a



1b

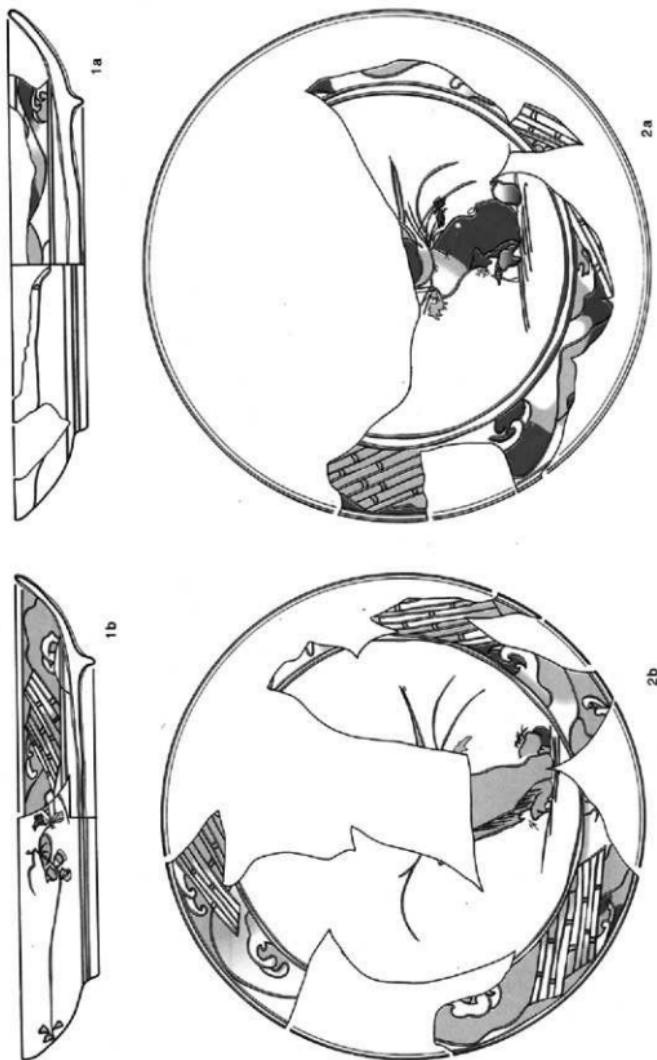


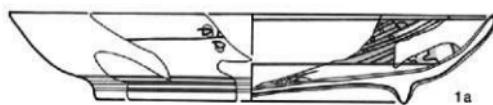
1c



第94図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (12)

第95図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (13)

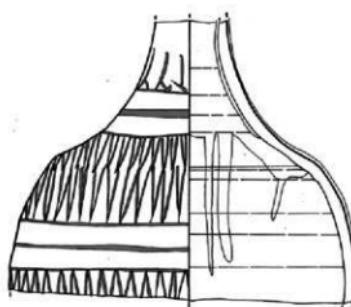




1a



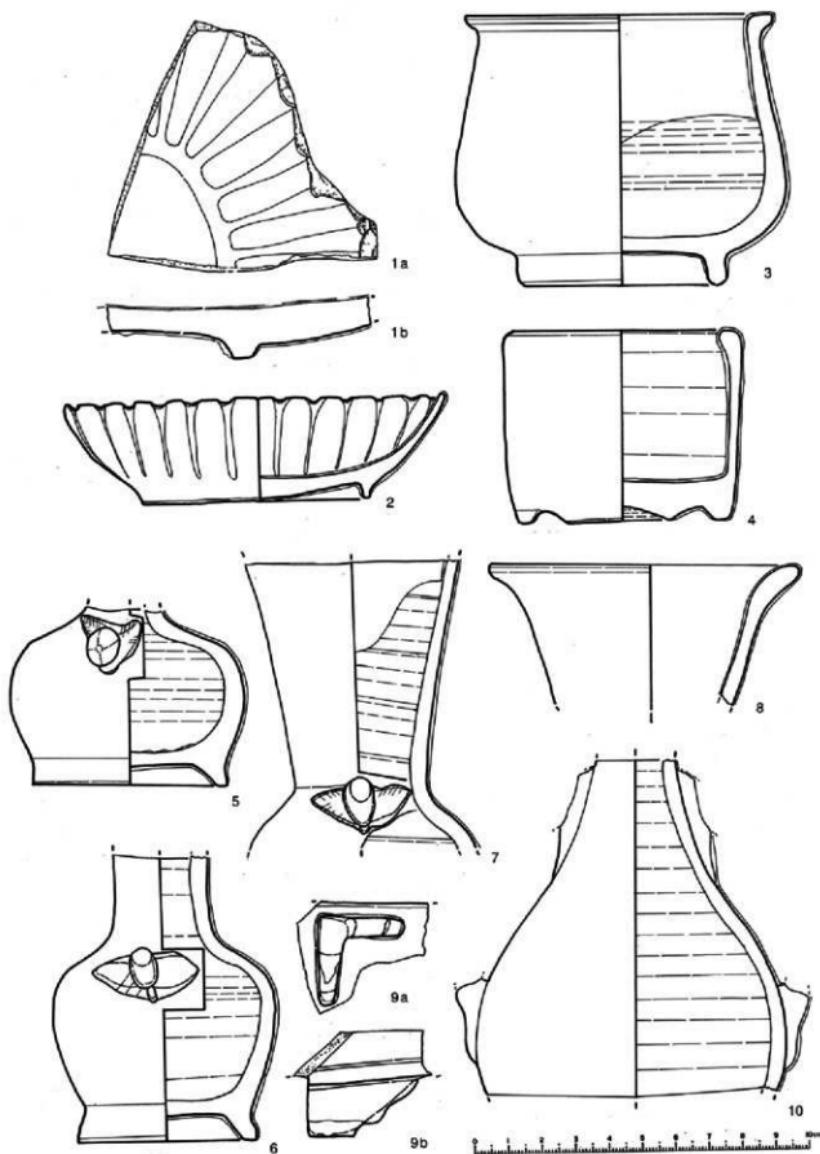
1b



2



第96図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (14)



第97図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(1)

D群（第83～96図）

76点について実測図を作成することができた。4形態に細別して説明したい。D群1類（輸入品を一括した）69点、D群2類（碗類）396点、D群3類（皿類）220点、D群4類（蓋類・鉢類・供膳具）86点であった。下記に列挙した順で述べる。

D群1類（第83図 第84図 第96図6 第88図5 第90図2・3・6・7）

器形としては大皿・中皿・小皿が認められる。これらの遺物は薄く高台に砂がついている特徴をもつ形態である。呉須の色も国産よりも深い青色を呈する。DY1出土が大半を占める。第83図は鳳凰文染付中皿で景德鎮窯の製品であり、16世紀に位置する。第84図1は中央部が欠損している。残った絵の構成から判断して鳥が描かれていたと思われる。17世紀初頭の漳州窯製品で染付蓮池水禽大皿である。本類は伝世品と想定される。

D群2類（第85・87・88図1・3・4・6・7～10 第89図1～5・8・10）

本群遺物の中で最も出土数が多い。第85図4は肥前、5は古九谷で両者とも17世紀代に位置づけられる。第87図1・2は伊万里の染付碗で19世紀の製品である。同図3は広東碗で同時期である。第88図1・3・8等は肥前系で近代に位置づけられる新しい染付碗である。

D群3類（第90図1・5・4 第92～96図1）

国産の皿類で伊万里の染付皿が主流を呈する。18世紀の製品と考えられ、底面に「大明年製」と記しているが、輸入品を模したものであろう。

D群4類（第86図1 第89図7・9 第91図1・2・4・5）

第98図1・2は肥前染付蓋で18世紀に位置づけられる。第89図7は絵唐津で16世紀末葉の製作である。同図8・9は志野の向付けで17世紀初頭に位置づけられる。第86図3は窯不明の鉢である。

E群（第97図）

国産品123点、輸入品2点の合計125点出土している。そのうち10点について作図した。輸入品としては第97図1・2の大皿と小鉢が認められ、2はほぼ完形である。窯は不明である。国産青磁としては同図3～10がある。すべてDY1からの出土であり、18世紀代に位置づけられる。供膳具の花瓶・香炉の器形で占められる。

F群（第99～104図）

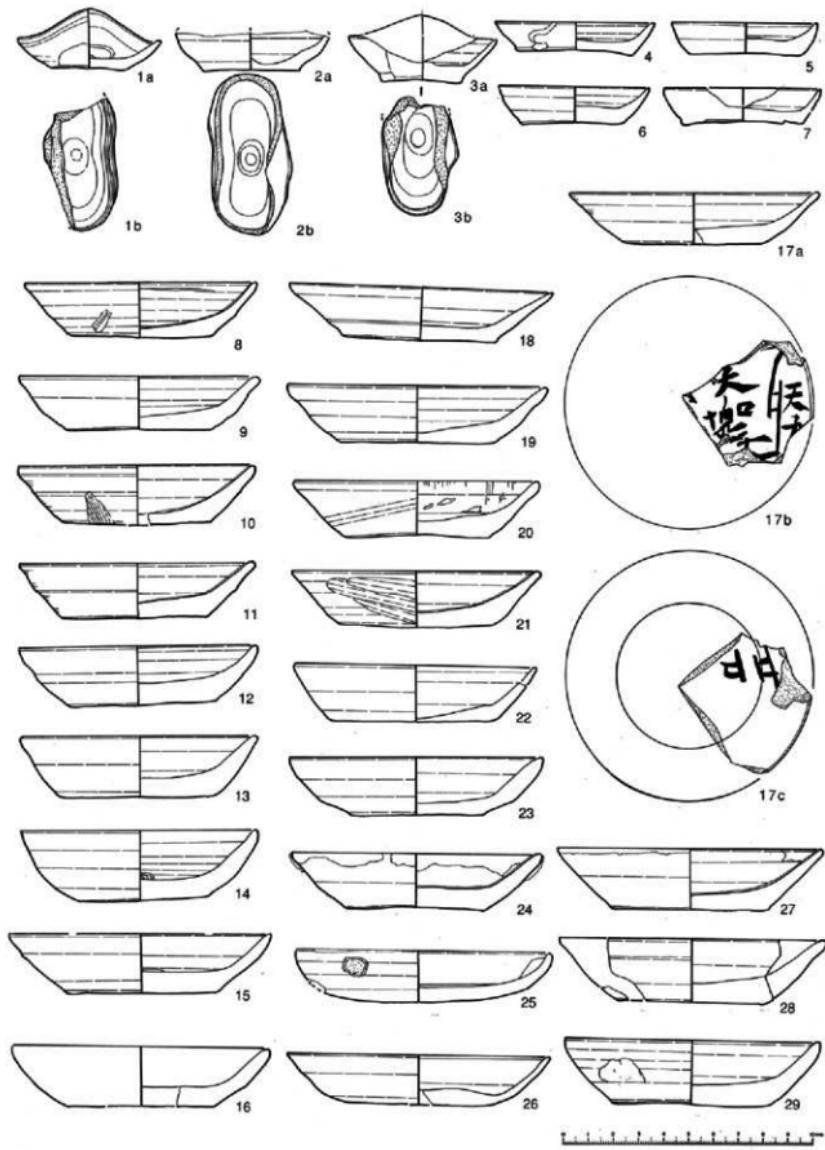
調査区の全域から出土しており、まとまって出土したのはDY1からで334点を数える。個体数は180点と推測する。総数では1,801点あった。その中には金箔かわらけ36点が含まれる。実測図は140点について作図した。第103図18は高台壊の瓦器質土器である。第98図に分類図、第5表に観察表を作成したので詳細については参照願いたい。

第98図で示すようにA1類からM1類までの22形態に細別した。口径と器高に重点をおいて細別したものである。口径は11.0～12.9cmが多く認められた。器高は3.0cm以内で、皿状を示すものが多い。大半は18世紀以降に位置づけられる。

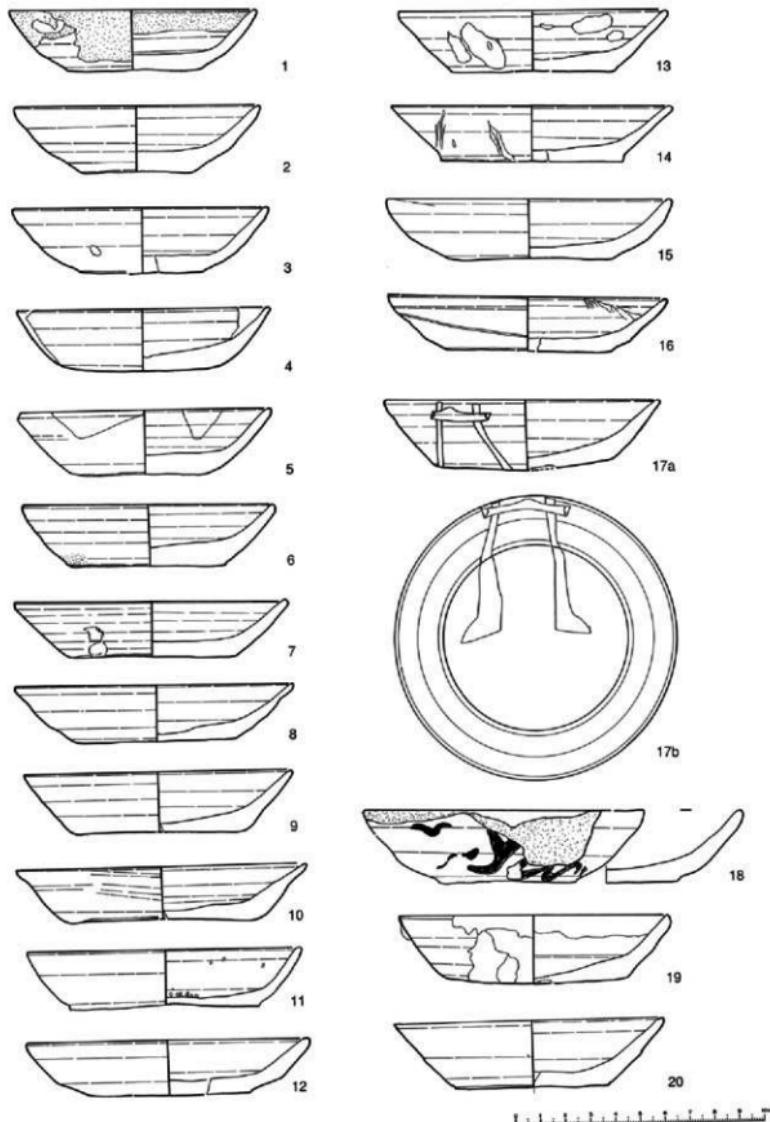
ススや炭化物が付着しているものも認められることから、灯明皿として再利用した痕跡を有する。金箔は塗ったものと、金箔を塗るために器として使用した両者がある。

A 1 類 口径 10.0cm未満 器高 1.0~1.9cm 4点 小型かわらけ	A 2 類 口径 10.0cm未満 器高 2.0~2.4cm 5点	A 3 類 口径 10cm未満 器高 2.0~2.9cm 2点	B 2 類 口径 10.0~10.9cm 器高 2.0~2.4cm 12点
B 3 類 口径 10.0~10.9cm 器高 2.5~2.9cm 9点	C 2 類 口径 11.0~11.9cm 器高 2.0~2.4cm 11点	C 3 類 口径 11.0~11.9cm 器高 2.5~2.9cm 34点	C 4 類 口径 11.0~11.9cm 器高 3.0cm以上 7点
D 2 類 口径 12.0~12.9cm 器高 2.0~2.4cm 4点	D 3 類 口径 12.0~12.9cm 器高 2.5~2.9cm 21点	D 4 類 口径 12.0~12.9cm 器高 3.0cm以上 1点	
E 2 類 口径 13.0~13.9cm 器高 2.0~2.4cm 2点	E 3 類 口径 13.0~13.9cm 器高 2.5~2.9cm 8点	E 4 類 口径 13.0~13.9cm 器高 3.0cm以上 3点	
F 2 類 口径 14.0~14.9cm 器高 2.0~2.4cm 1点	F 4 類 口径 14.0~14.9cm 器高 3.0cm以上 3点	G 4 類 口径 15.0~15.9cm 器高 3.0cm以上 3点	
H 4 類 口径 16.0~16.9cm 器高 3.0cm以上 3点	I 4 類 口径 17.0~17.9cm 器高 3.0cm以上 1点		
K 4 類 口径 19.0~19.9cm 器高 3.0cm以上 1点	L 4 類 口径 20.0~20.9cm 器高 3.0cm以上 1点	M 1 類 耳形かわらけ 3点	

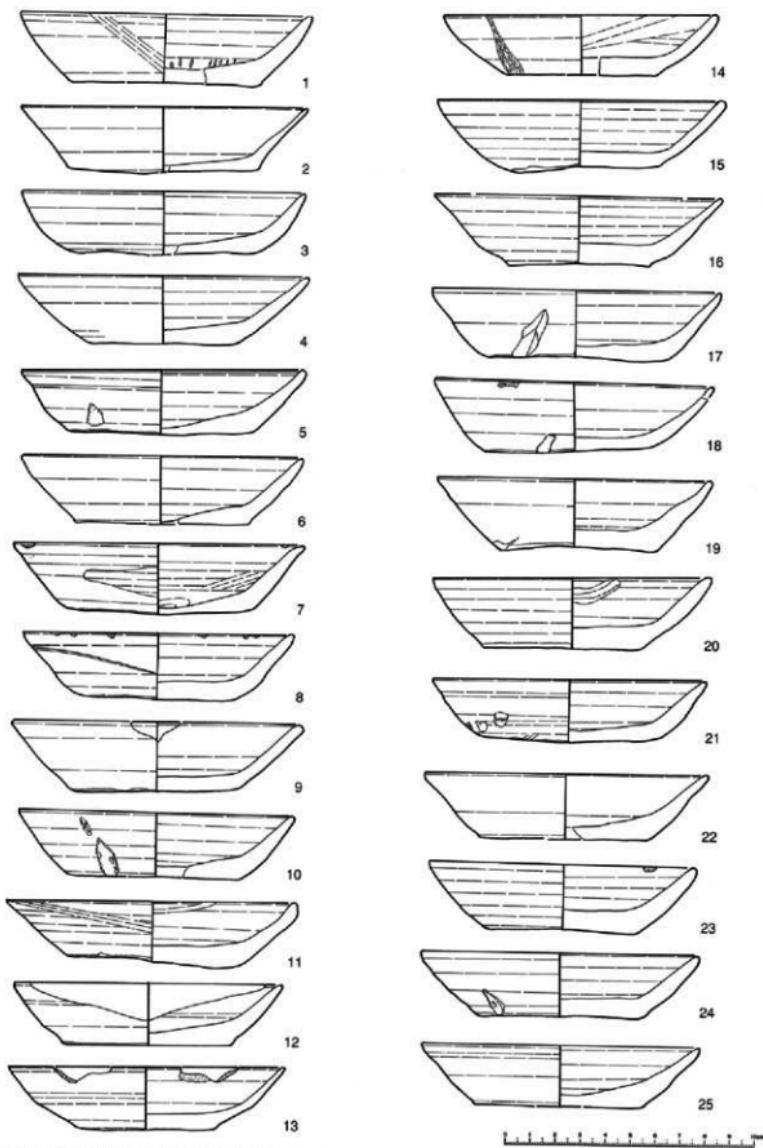
第98図 米沢城東二の丸跡出土かわらけ分類図



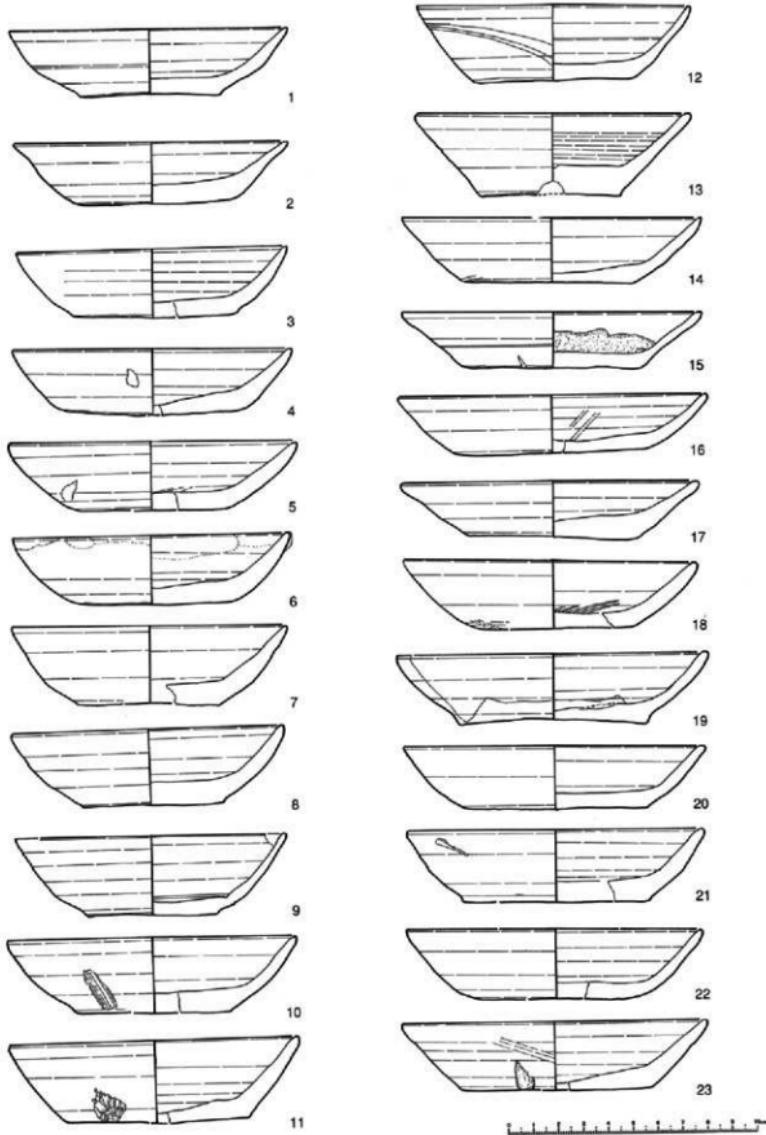
第99図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (1)



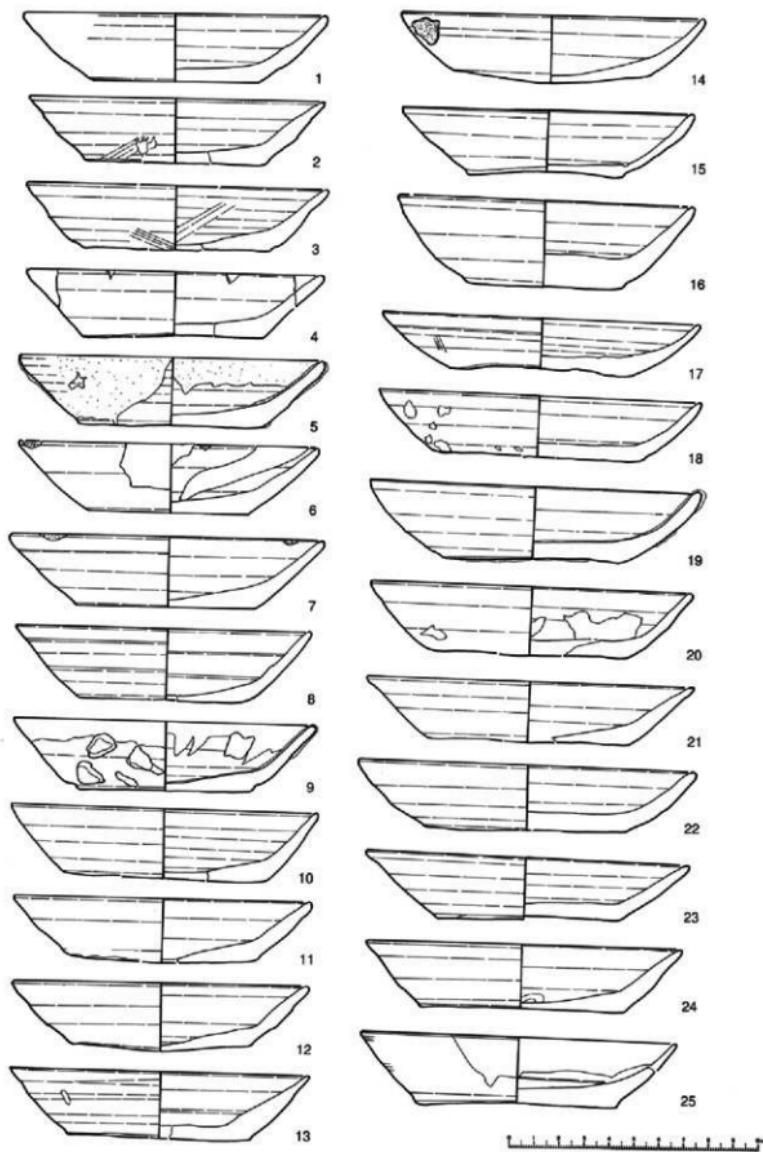
第100図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (2)



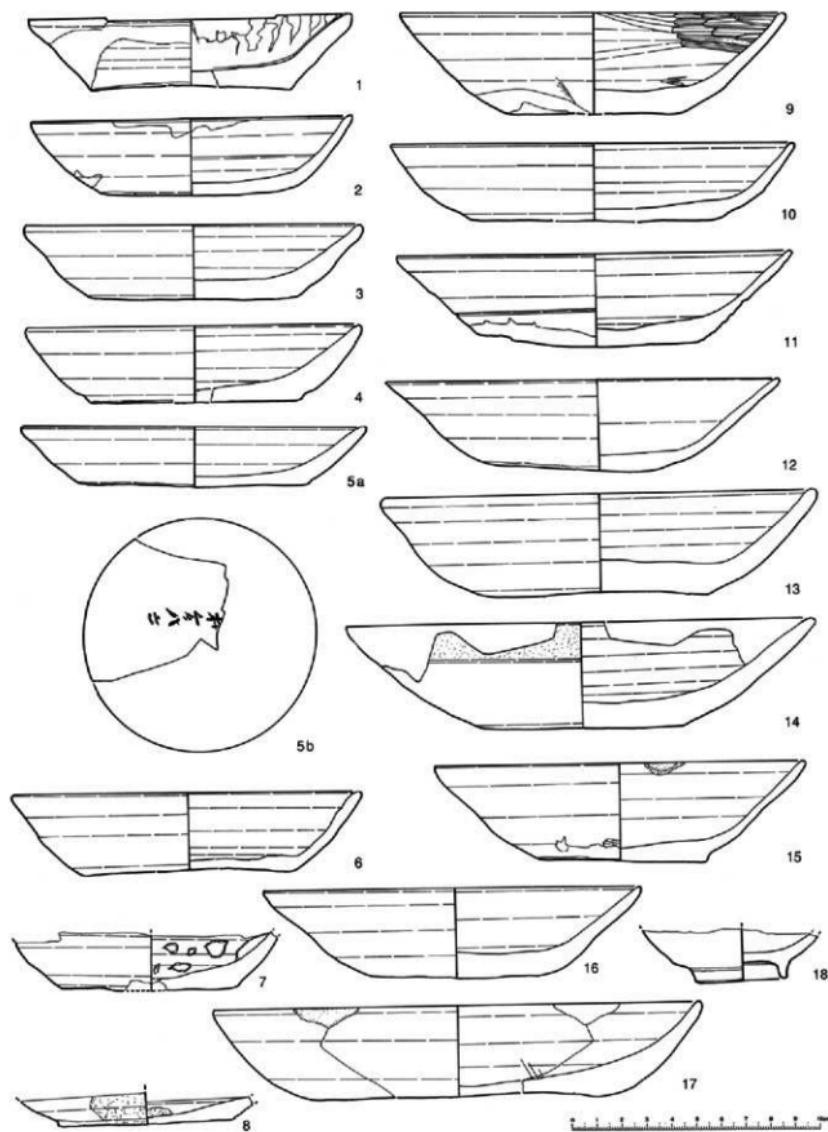
第101図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (3)



第102図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (4)



第103図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (5)



第104図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (6)

G群（第105図～118図1～4）

木器を一括して本群とした。出土数の多い箸についてはH群とし、別に扱うこととしたので後述する。総計は218点であった。細別するとG群1類（漆器）40点、G群2類（祭祀用木器）3点、G群3類（曲物）33点、G群4類（木製品）41点、G群5類（建築部材）18点、G群6類（桶）2点、G群7類（下駄）23点、G群8類（杭）31点、G群9類（柱根）6本となる。

G群1類（第105図）

ロクロ回転による彫物であり、楕形・皿形の器形がある。保存状況が悪く、著しく原形が失われた出土状況であり、図化できたのは9点だけであった。

第105図3が注目される。両黒漆椀の外面に金色で描かれた「竹に雀」の文は円の中に左右対称に雀と竹の葉を配置した構図である。右側に嘴を開いた雀、左側に嘴を閉じた雀を描く。雀の羽根1枚、1枚までわかる丹念な描写であり、家紋の構図は「小花小紋様雛子」（重要文化財）に付いている紋に類似する。年代としては17世紀後半に位置づけられる。他の中でKY19出土の6・7・9は内耳土堀に伴う漆器であり、中世期に想定される。

G群2類（第106図1・2 第113図3）

刀形を有するもの1点、人形を呈するもの1点、絵馬形の木製品1点が出土している。呪術的要素をもつ木製品と理解される。儀式に使用後廃棄されたものであろう。

G群3類（第109図1～3 第114図1～3・5）

第109図1～3は曲物の底板材である。第114図3は形状から判断して、樽の底板と考えたい。同図1は曲物のひしゃくで底が欠損している。同図2は完形で底板も現存している。食器として使用されたものと考えられる。17世紀に製作された曲物類である。

G群4類（第106図3～5 第109図5～7 第114図4～9 第121図1～3）

バイと呼ばれる形態で第106図3・4は木魚をたたく時に使用する仏具である。5もバイと呼ばれ、鐘をたたく時に使用する仏具である。第107図4・5・7は戸を固定する際に使用したと想定されるクサビ木製品である。同図6は用途不明である。第114図4は箆であり、現代とかわりない。同図6・7は櫛であり、6は完形で出土した。同図8は用途不明品としておきたい。同図9は炭化したひしゃくの部品であろう。第121図1・2は御膳の横木であり、クギ穴が認められる。3・4については用途不明と言わざるをえない。

G群5類

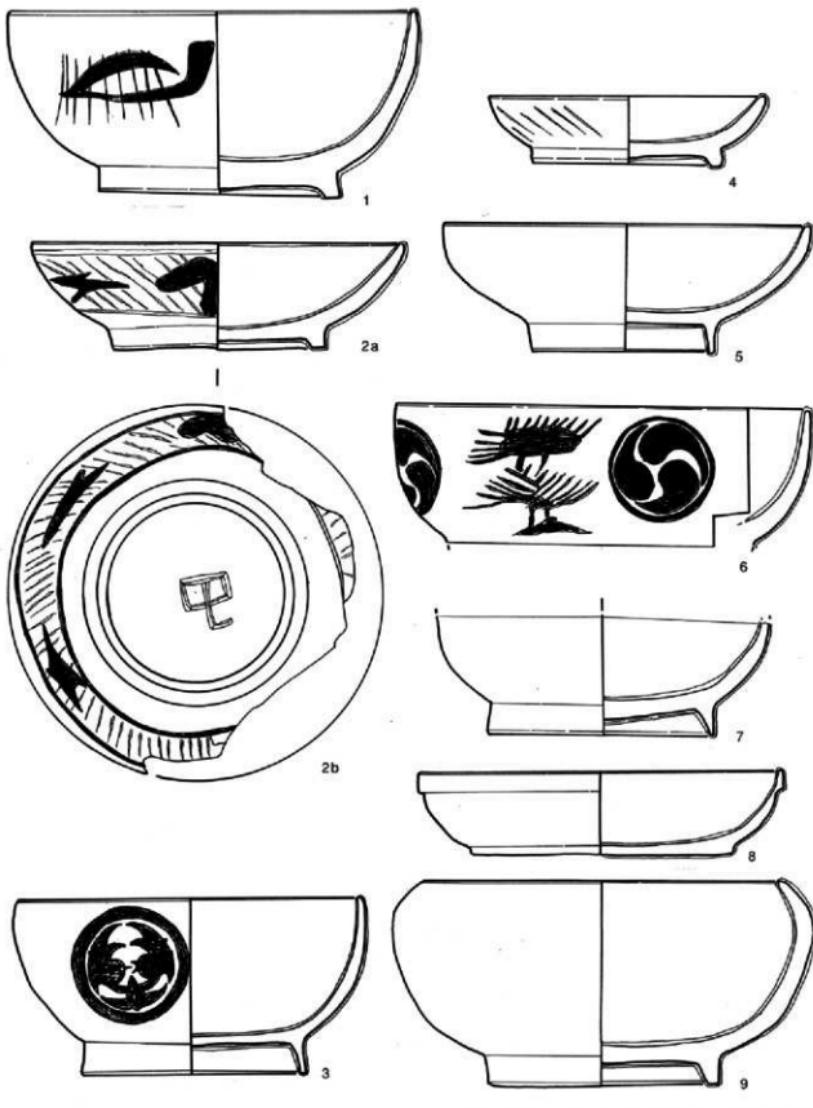
建物を構成していた板材等であり、すべて破片として認められ、焼成面をもつのが特徴であった。火災の際に焼け残ったものを廃棄したものと考えられる。

G群6類（第115図 116図）

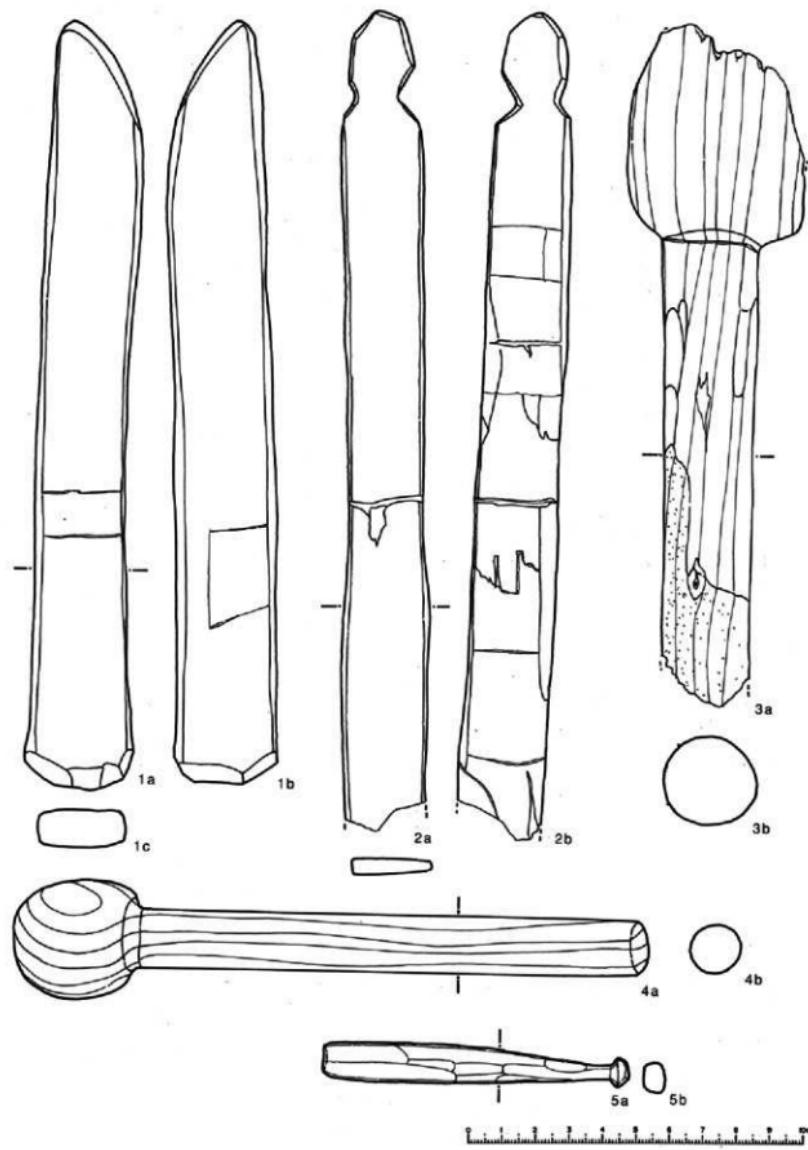
KY4・KY5の分岐箇所に設置された桶である。この他に横木10点が出土している。木目が混んでいることから判断して、高山にある木材と想定され、針葉樹と考えられる。

G群7類（第108図～113図1・2）

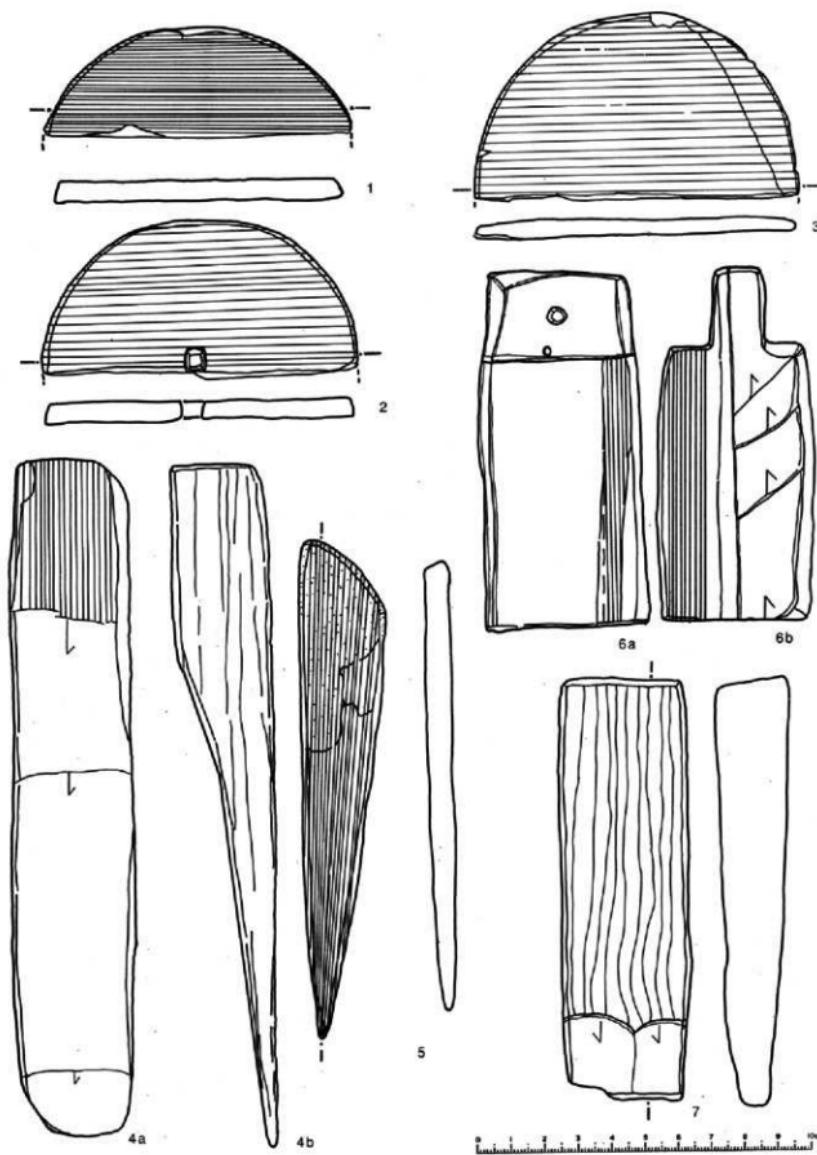
差歎下駄11点、差歎下駄の歎が4点、一本の下駄6点、子供用下駄2点が出土している。第108図の形態は本市の大浦C遺跡からも出土しており、共存するのは内耳土堀であった。今回



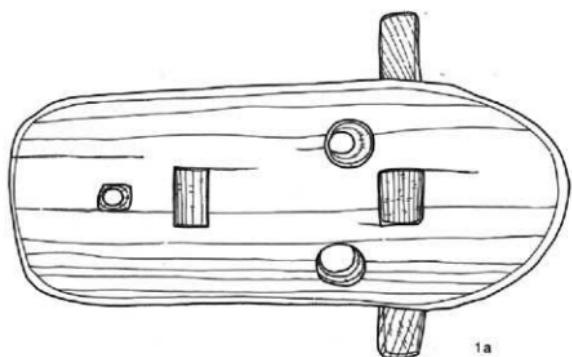
第105図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (1)



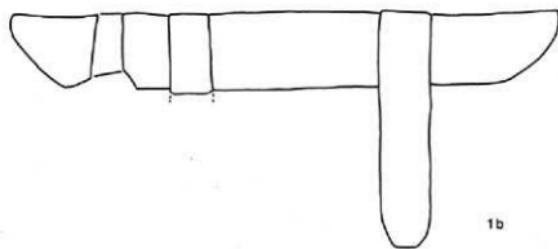
第106図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図（2）



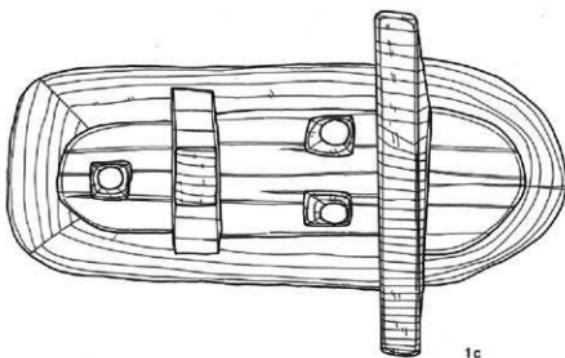
第107図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図（3）



1a



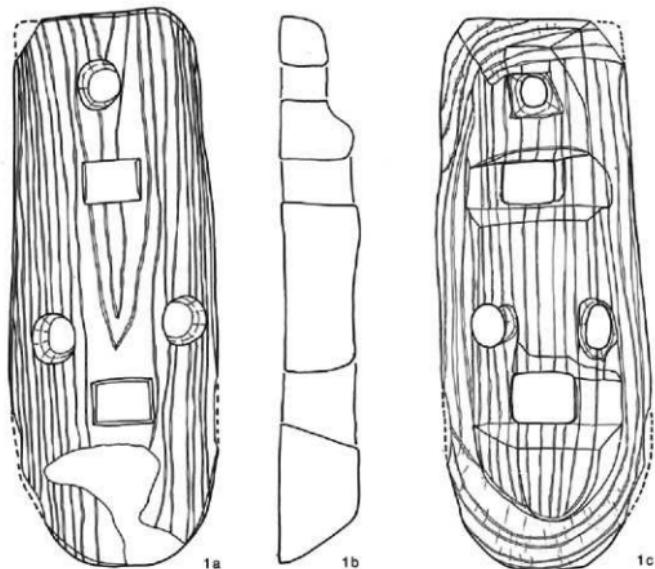
1b



1c



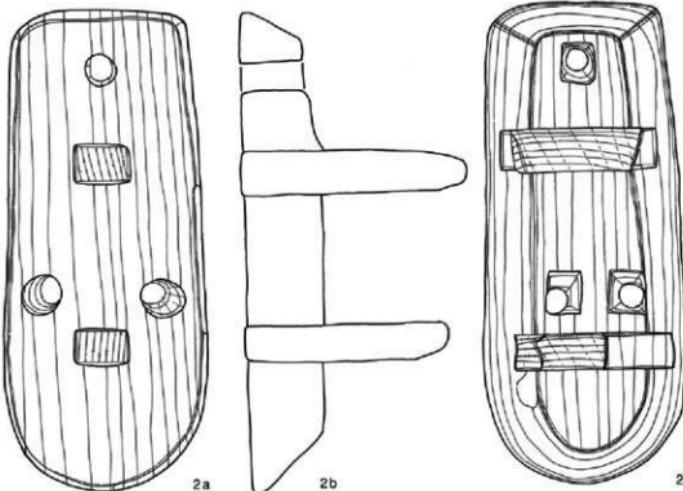
第108図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (4)



1a

1b

1c



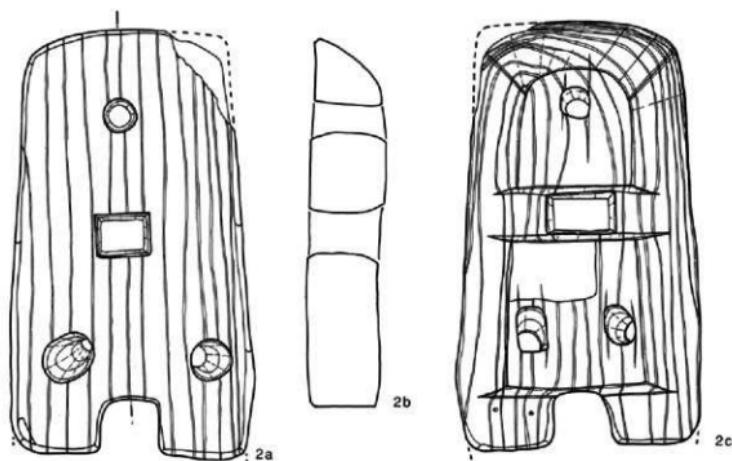
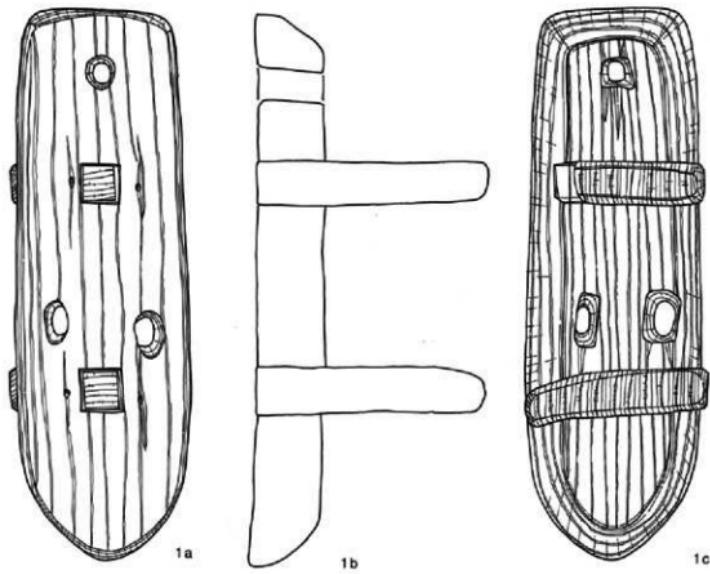
2a

2b

2c

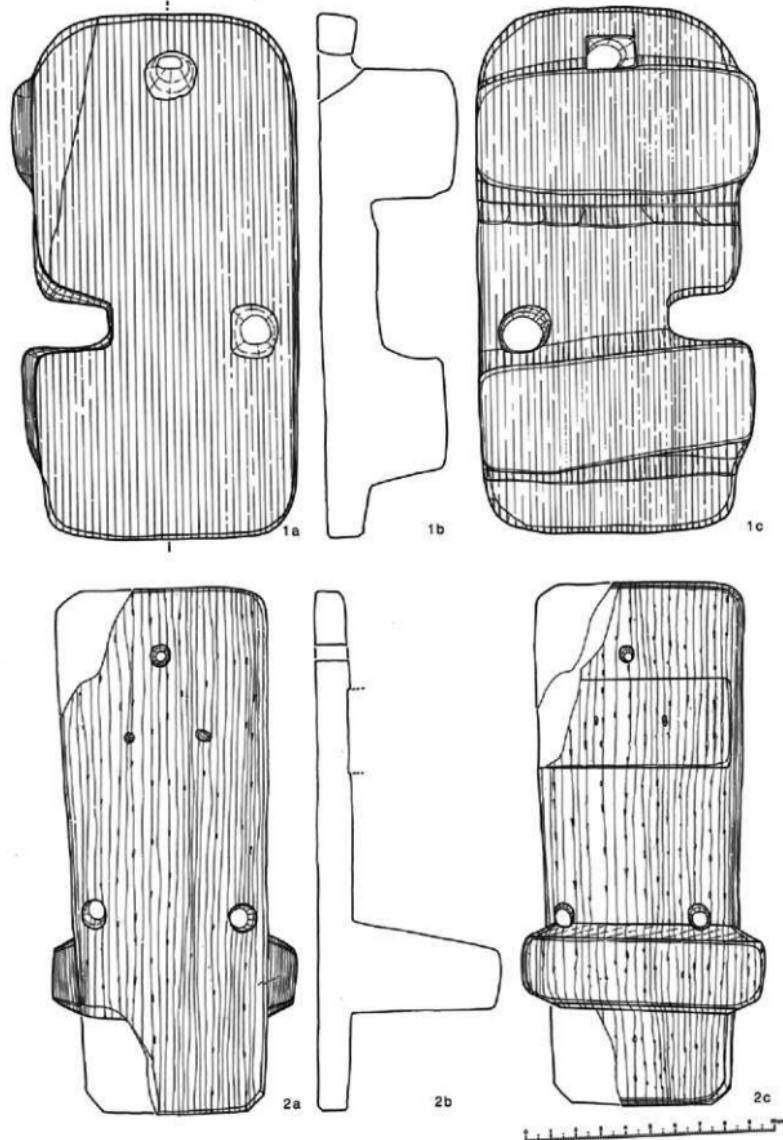


第109図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (5)

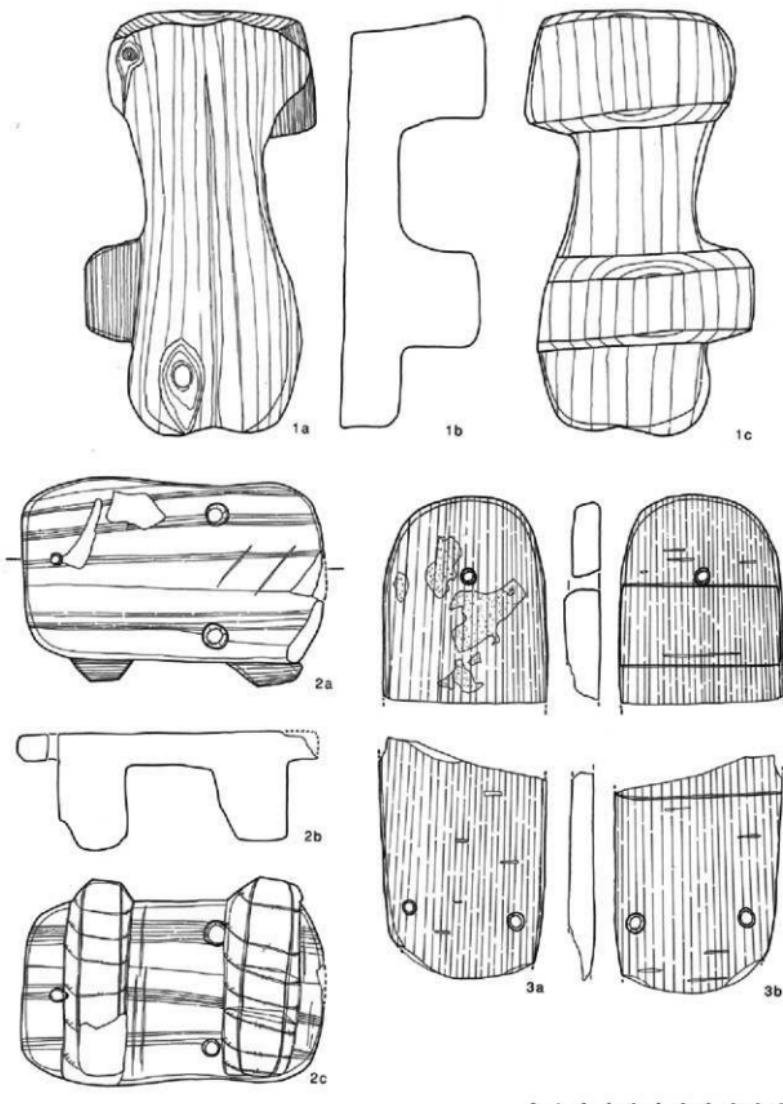


第110図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (6)

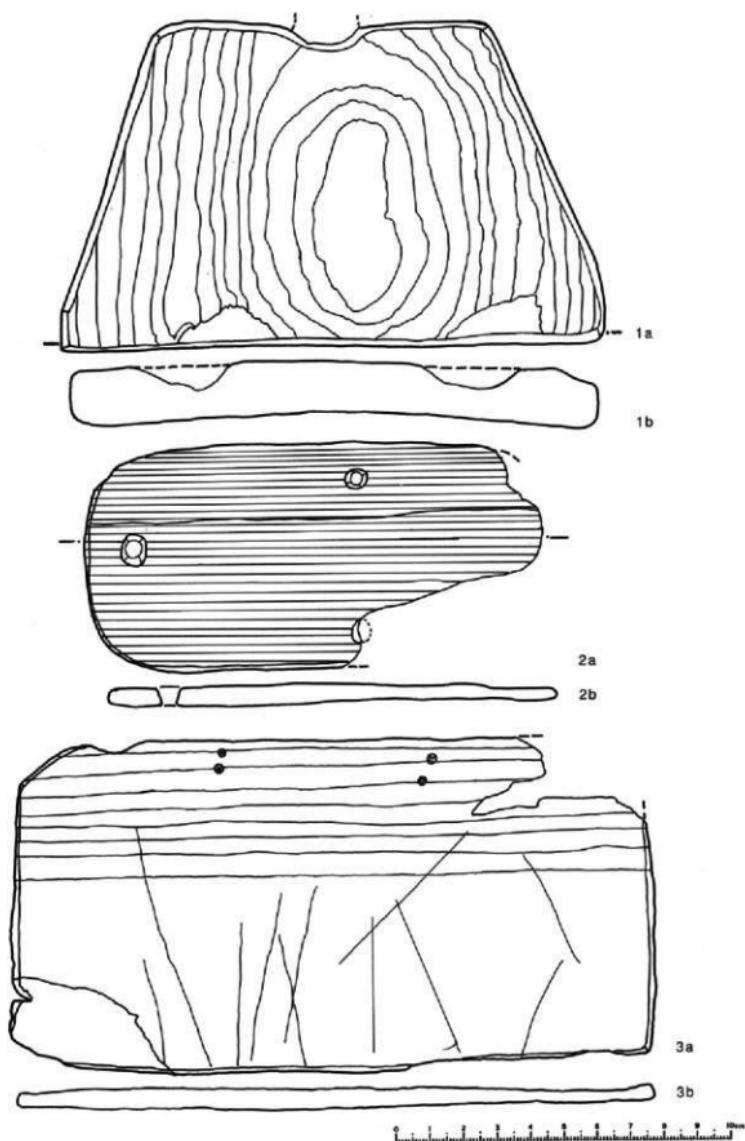




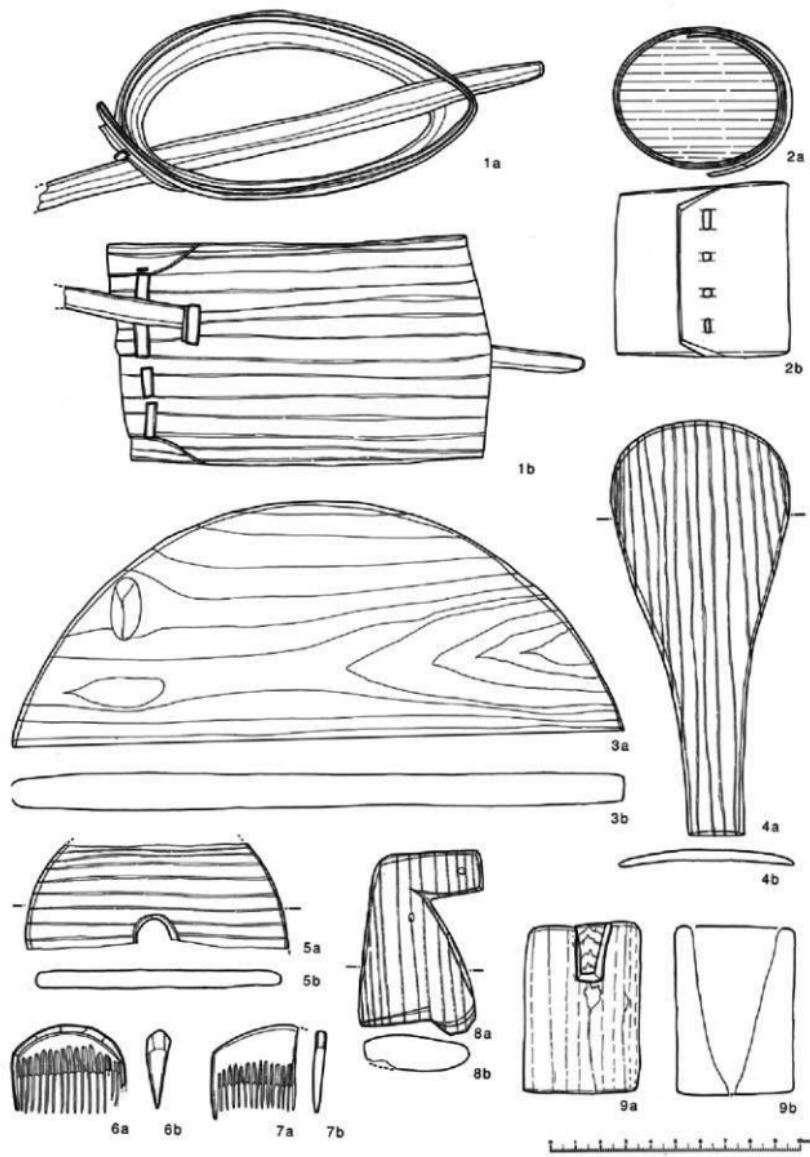
第111図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (7)



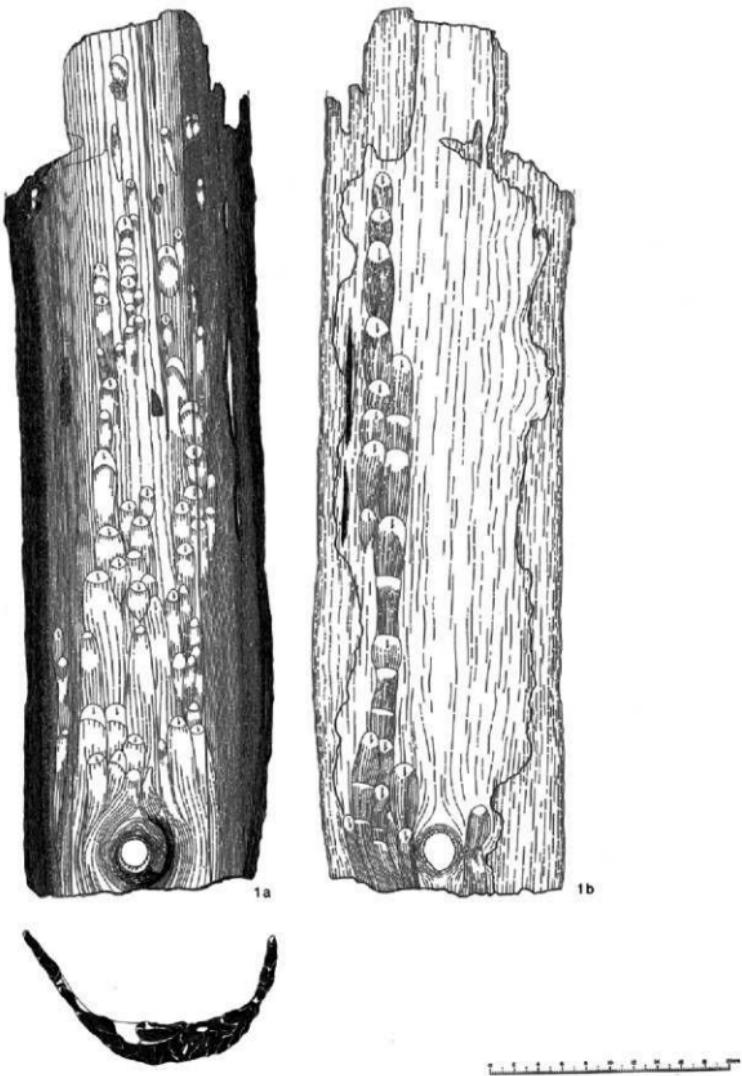
第112図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (8)



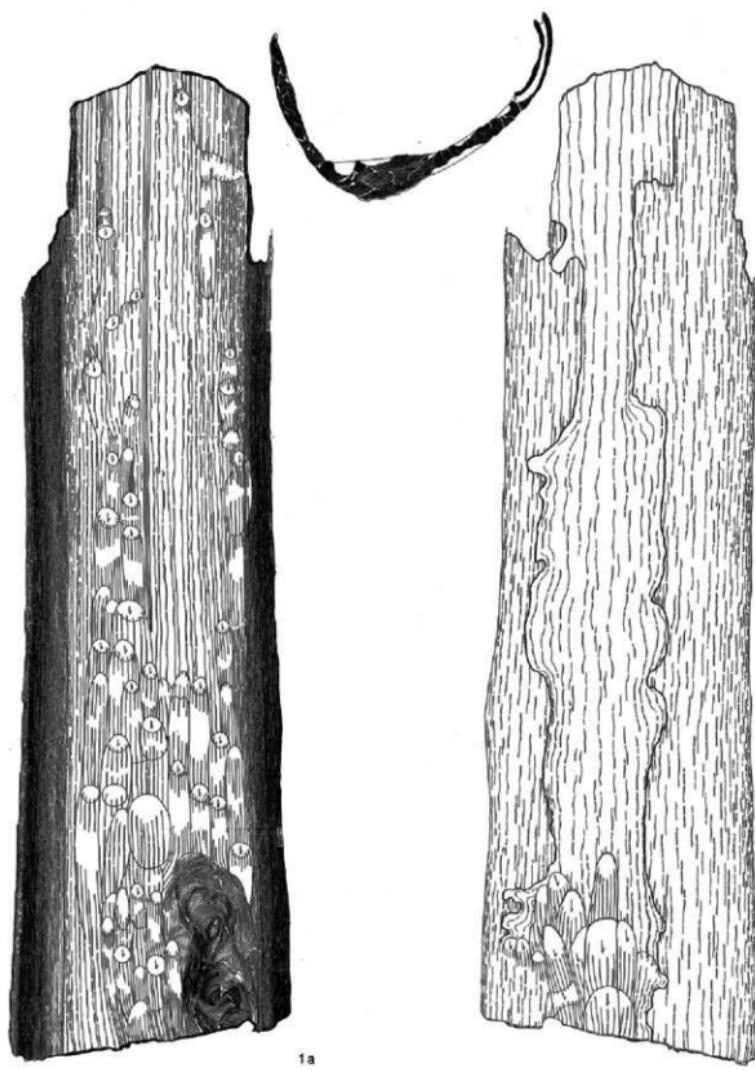
第113図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図（9）



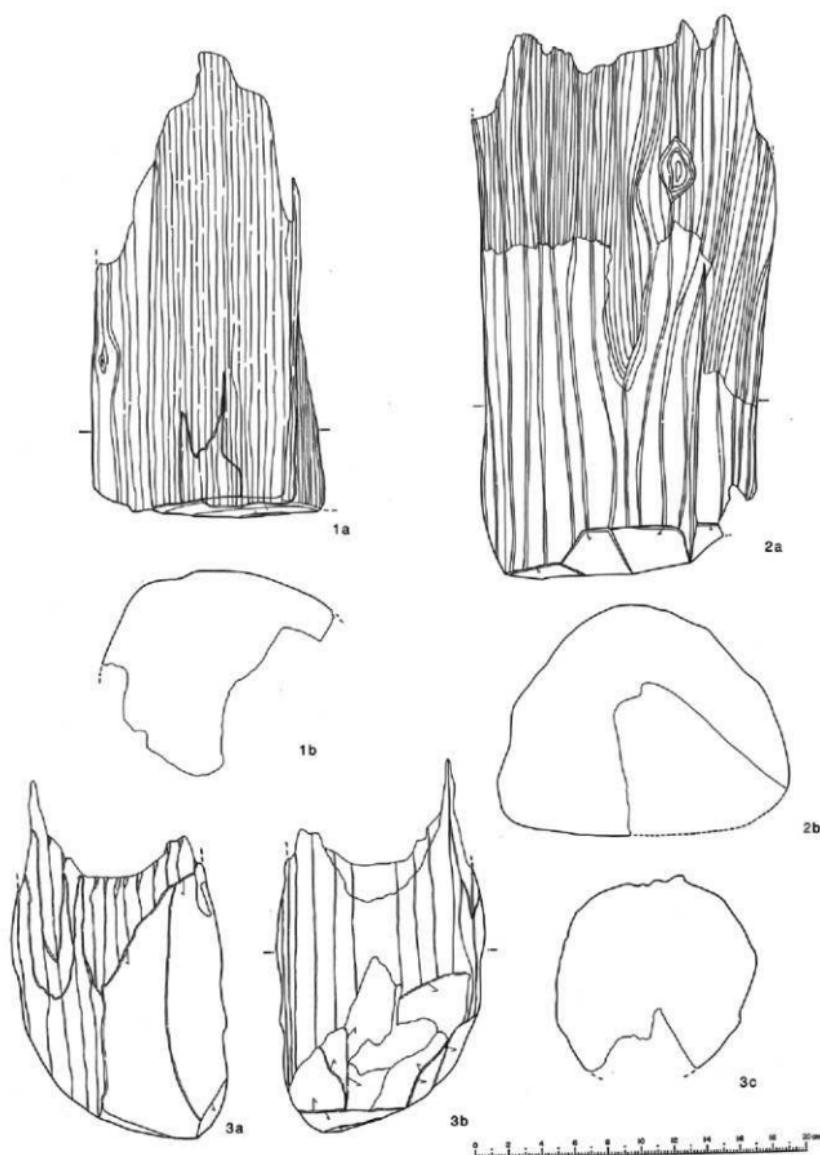
第114図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (10)



第115図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (11)



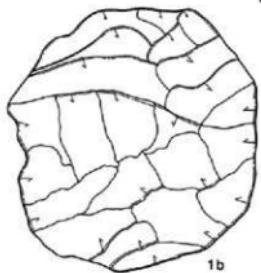
第116図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (12)



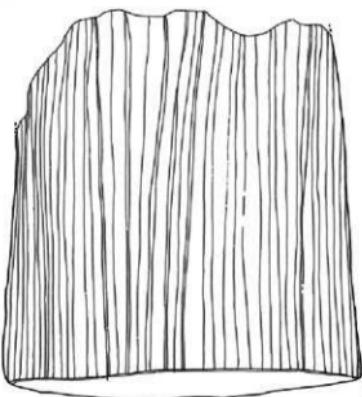
第117図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (13)



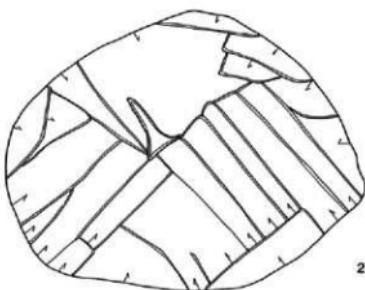
1a



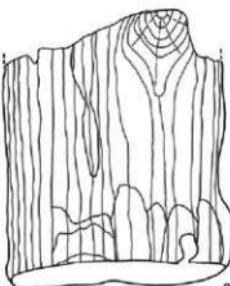
1b



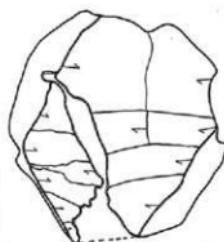
2a



2b



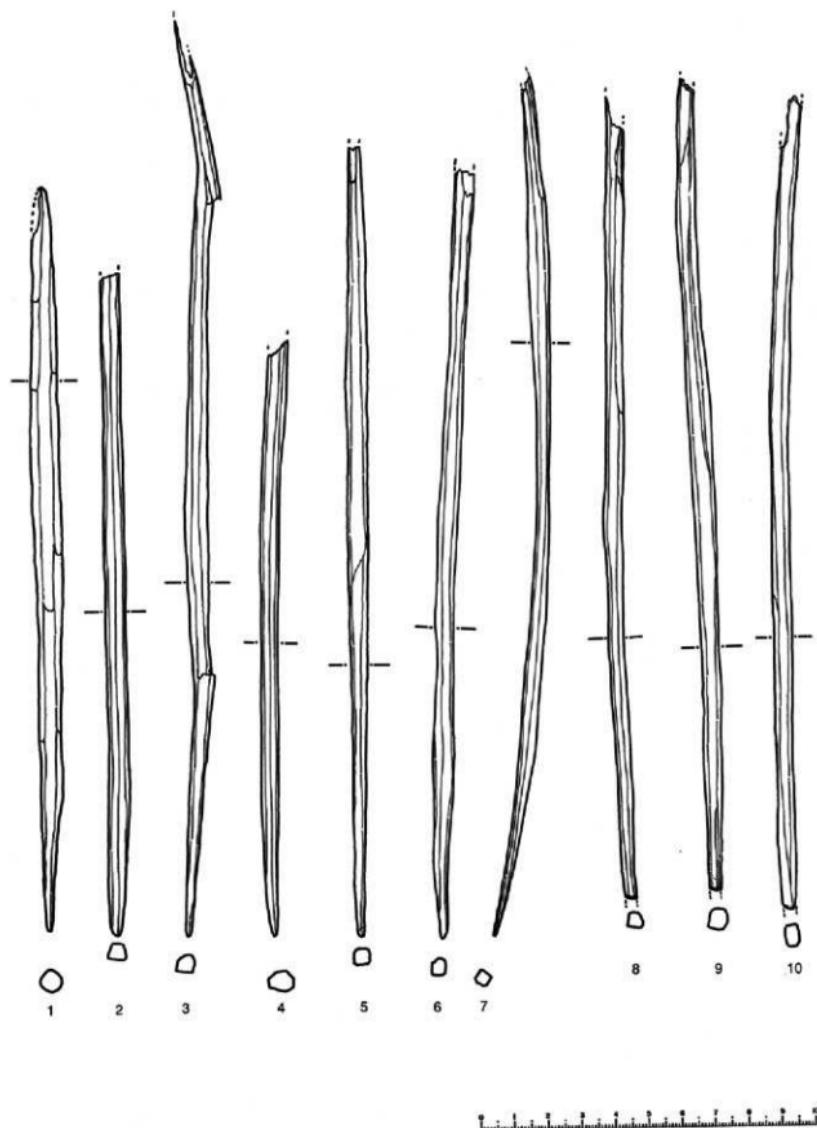
3a



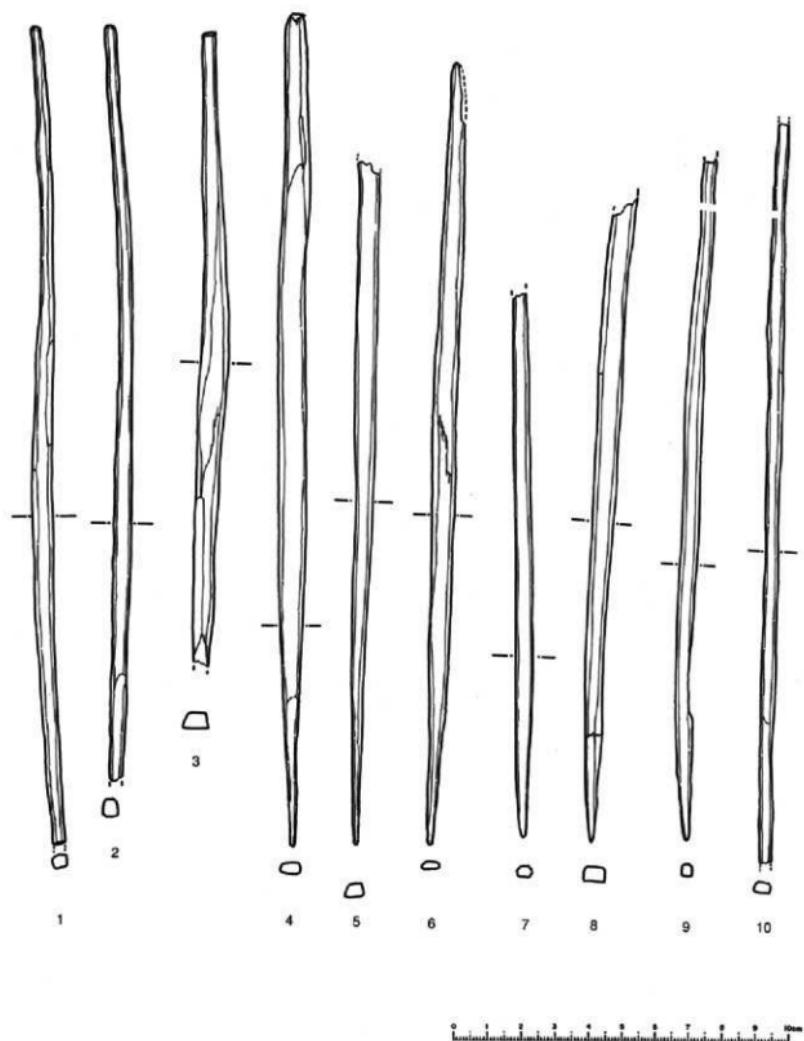
3b



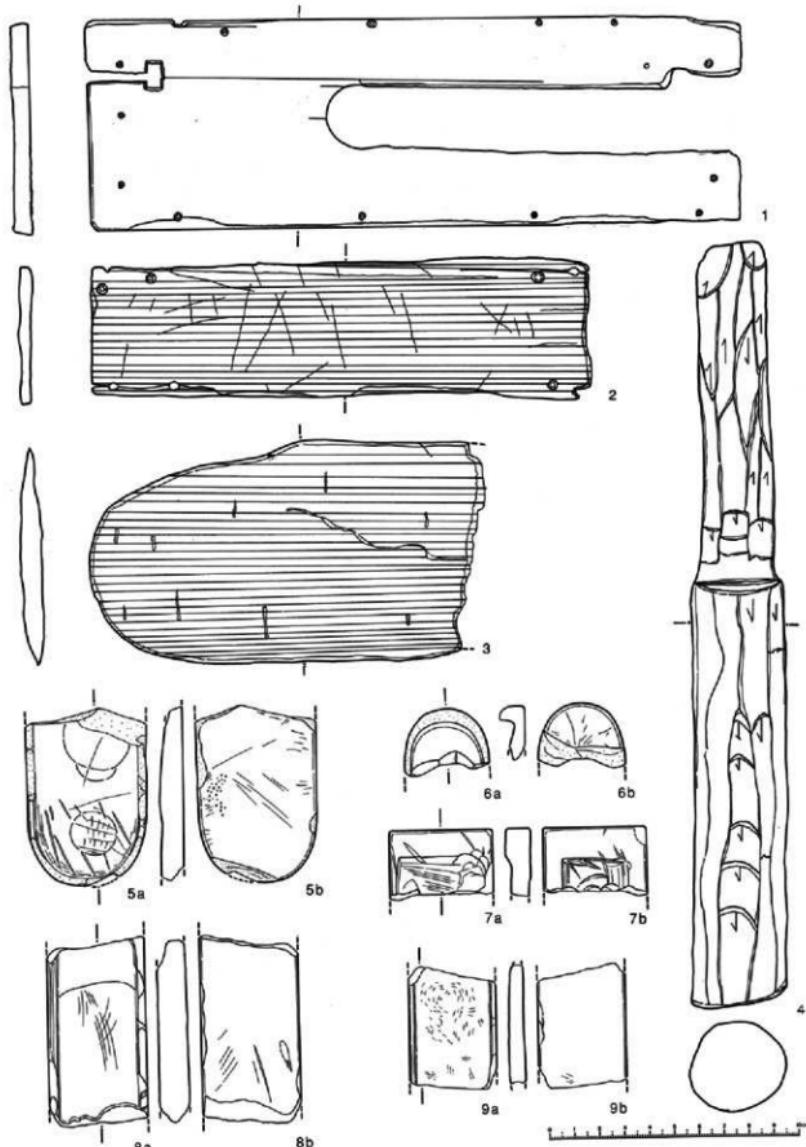
第118図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (14)



第119図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (15)



第120図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (16)



第121図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (17)

も同様な伴出土器が認められる。大浦C遺跡からは第111図1・2の下駄は出土していないことから差歎下駄の形態は前述した下駄に先行するタイプと言える。ただし、出土状況から判断すれば共存しているとも考えられる。形態がバラエティなのは身分の差によってハキモノが違っていたとも言える。

G群8類

溝状造構の縁辺を補強するために用いられた杭であり、大半は上部が腐食していた。使用した杭は削木はあまり認められず、細い木を使用しているのが多く認められた。

G群9類（第117図 第118図）

中世期に位置する建物跡を構成する柱穴に存残した柱根である。上部は切り倒して再利用し、根元はそのまま放置したものと考えられ、条件の良い箇所が残ったものである。

◎H群（第119図 第120図）

DY 36・40・62の重複する土壙群を中心に出土しており、629点を数える。第8表のその出土状況を記した。第122図には分類図を作成したので参照願いたい。使用している木材は針葉樹と考えられる。両端が尖状を呈す形態が多く認められた。

◎I群（第123図）

こずか着装柄3点は1～3、桶の取手が4・9、仏具飾金具3点は5～8・10、精棟の際の取鉢11～13、古銭14～26、各詳細については観察表を参照願いたい。

◎J群（第124図 第125図）

J群1類（茶臼）2点、J群2類（砥石）27点、J群3類（硯臼）2点、J群4類（石塙）1点、J群5類（円盤状有穴石製品）3点、J群6類（石製こもづつ）1点がある。列挙した順に説明したい。なお、石組水路に使用した削石については石製品には含まない。

J群1類（第124図1・2）

御影石を素材に用い、台付皿形に整形した石臼である。使用した素材や丁寧なつくりじゃらお茶道具のひとつである茶臼と考えられる。第124図2はDY1出土であり、18世紀に一括廃棄された遺物である。この形態は本市としては初めての出土例であった。

J群2類（第125図7・8）

粗面岩、緑色凝灰岩を素材とし、長方形に整形して使用している。寺院には台所もあったことから、調理用の包丁を研磨する際に使用したものであろう。すべてに使用した痕跡を有する。

J群3類（第125図1）

そばなどの穀物を粉にする道具であり、上と下の2個で構成され、上の石を回転させて使用するもので、図示した1は回転させるための棒を入れる横穴があいていることから上部の部分であることがわかる。石材は安山岩を使用している。

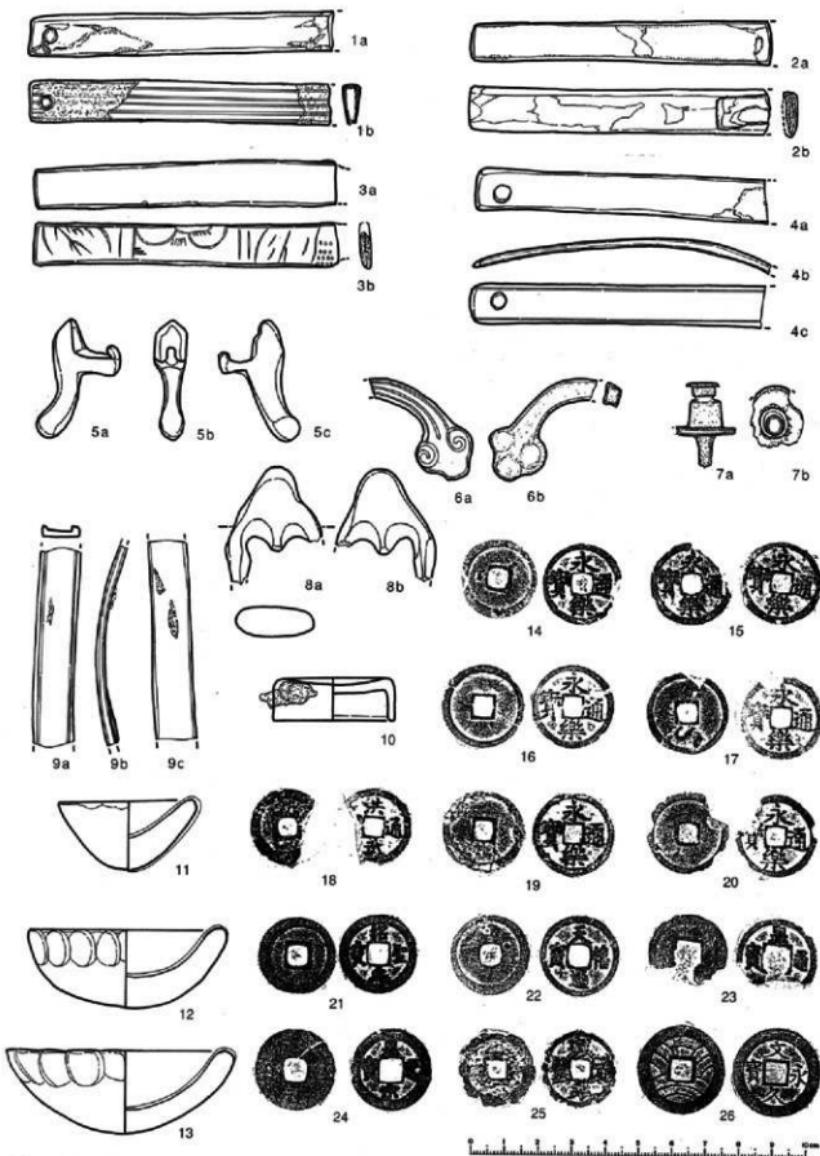
J群4類（第124図3）

片口をもつ石塙であり、石材は凝灰岩を使用している。底面が物もすりつぶしたことに使用した痕跡も認められることから、石臼とも言える。両者の機能を有するものと考えられる。

J群5類（第125図3～6）

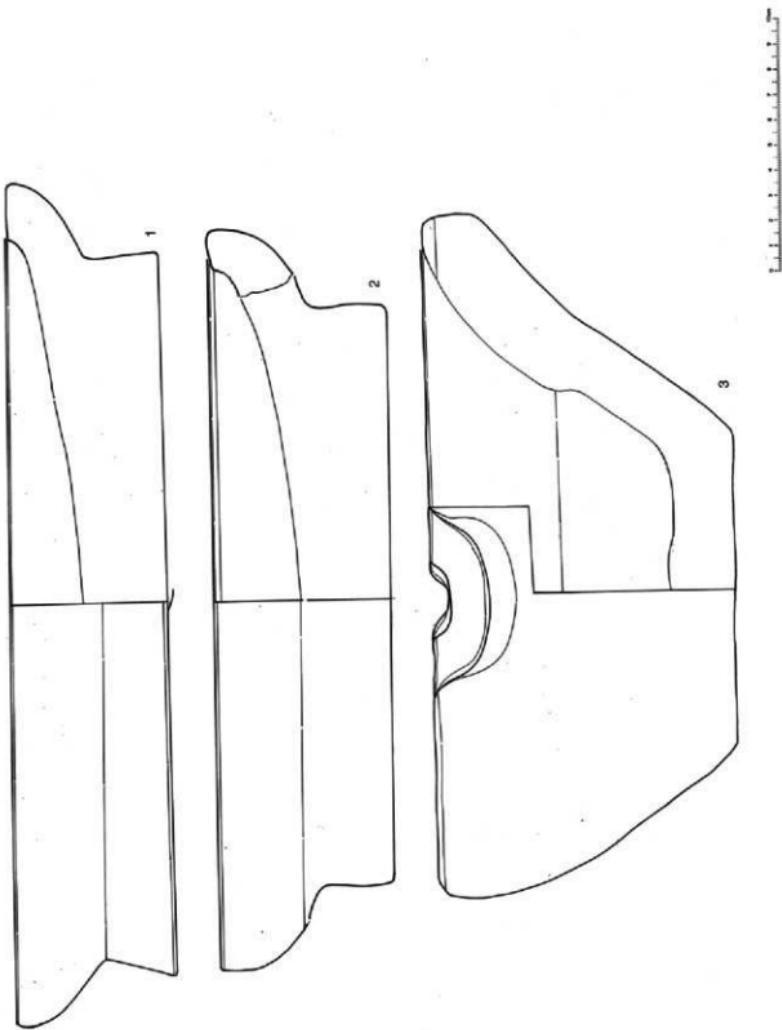
分類	A 1類	A 2類	A 3類	B 1類	B 2類	B 3類	C 類	D 類
形態								
特征							細身の形態を本類とする。	不定形
特徴	両端が尖状を呈する。	片方だけ尖状を呈する。	両端が平担である。	うすく両端が尖状を呈する。	片方だけ尖状を呈する。	両端が平担である。	A類～C類以外のものを本類とする。 (未完成品を含む)。	

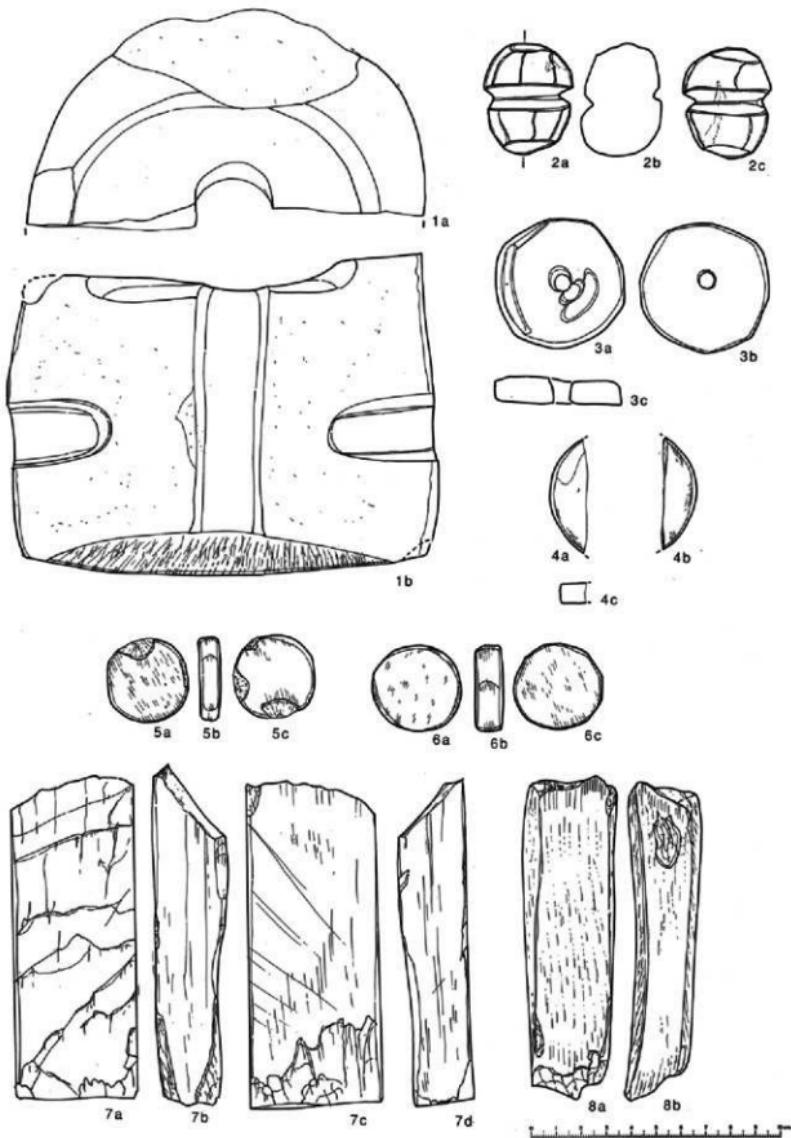
第122図 米沢城東二の丸跡出土箸分類図



第123図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (10)

第124図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (1)





第125図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図(2)

比較的やわらかい石材を使用し、円形状に整形し、中央部に穴をもつ3、穴をもたない5・6の2形態がある。用途としては生産に係わるものではなく、遊具の一種と考えたい。

J群6類(第125図2)

泥岩質の石材を用いタマゴ形に整形した後に、中央に鋭利な刃物で溝を入れた形態から判断して、むしろなどを編む場合の重りと想定される。

◎K群(第121図 第126~128図)

刻線の文様を有する硯は第128図1・2の2点、粗削りな面をそのまま利用している第128図の3がある。また第121図5~9の小形の形態も認められた。大半は欠損したことから、廃棄されたものであろう。

6まとめ

近世城郭の中核部分を10,000m²という面積を調査した事例は少なく、全国的にも貴重な調査となった。堀跡の最も古い遺物は伝世品と考えられる13世紀の青白磁梅瓶である。また、染付・白磁等の輸入陶磁器や内耳土壺・三引両紋漆器等の16世紀の遺物が少量出土している。

堀跡中層は肥前磁器・相馬產陶器の碗が増える。漆器椀も多く、皿の比率が減少する。調理具としては产地不明の摺鉢が多く認められた。そのほか相馬產土瓶・成島產壺等が出土する。

堀跡の上層は16世紀から17世紀初頭の中国染付が1点出土している。土星の構築時期の上限を確認することができた。その他、型紙押しの磁器碗等、明治時代の遺物が少量出土している。土星を崩す段階で廃棄したものと考えられる。

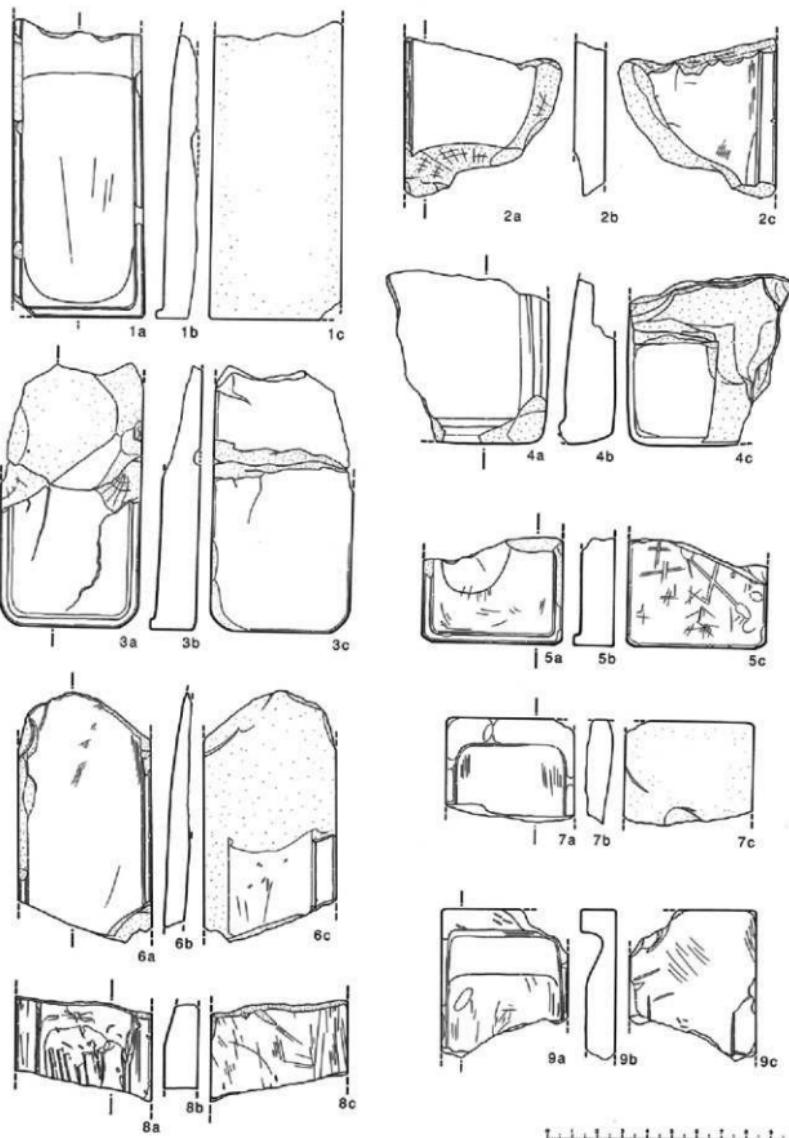
堀跡に関しては前述した調査結果から構築年代は17世紀初頭に位置づけられる。下層の遺物は構築の際に流れ込んだものと理解している。廃城は明治期であり、遺物から吟味した場合と文献等は一致している。堀跡の調査結果を加味しながら担当区の遺構・遺物について年代別に述べ、まとめとしたい。

◎奈良・平安期

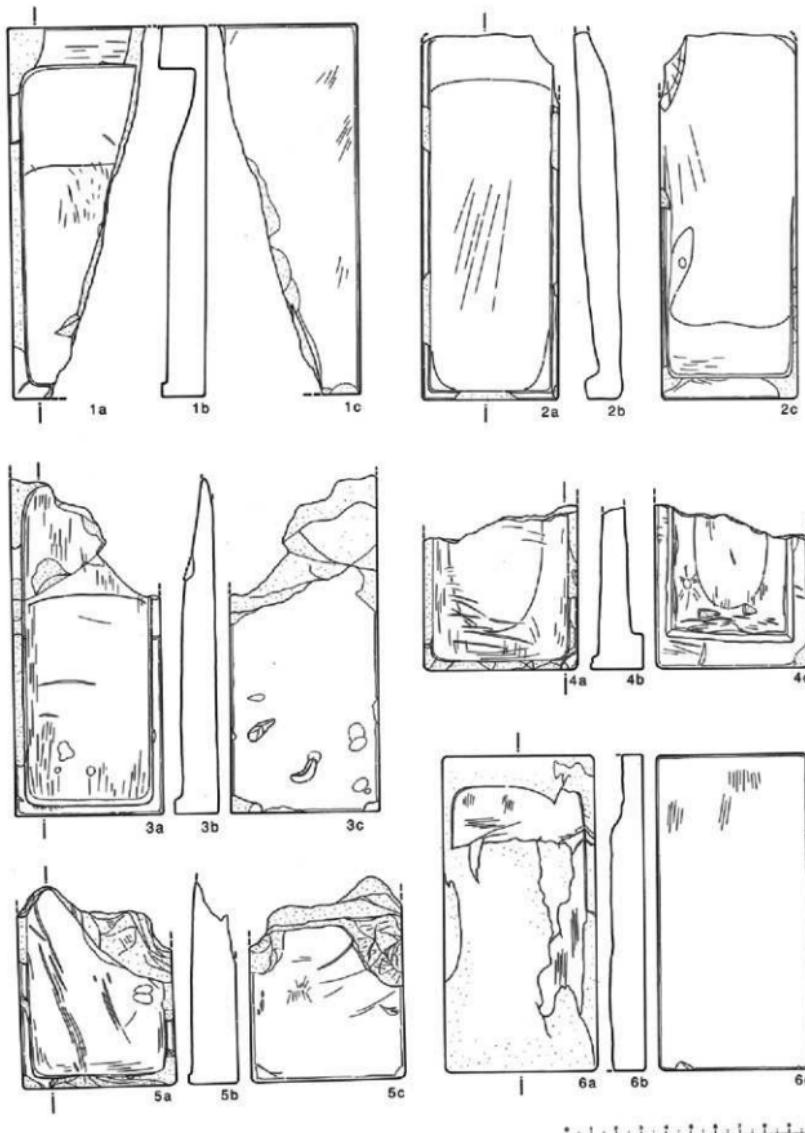
過去に実施された調査区から出土したこの時期の遺物は少量であり、論じるまでには至らなかったが、今回多量に出土したことにより、米沢城周辺に集落があったことは十分予想されることとなった。年代としては8世紀末葉から9世紀初頭の遺物群であり。本市としては大浦遺跡群等がある。集落が広範囲にわたって存在していたことが明らかになった。

◎中世期

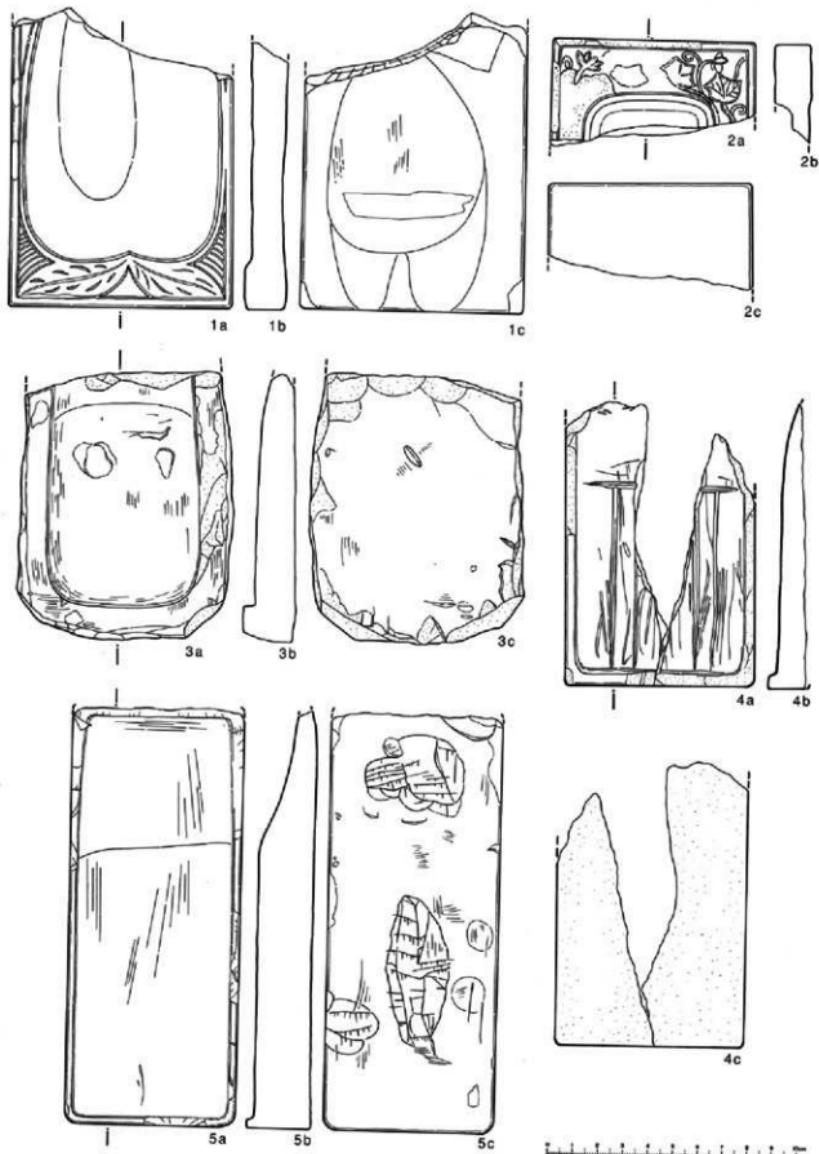
掘立建物跡や溝状造構・瓦器質土器が認められた。掘立建物跡は14棟あり、I期からIII期にわたって構築されたことを示している。代表される遺物としては内耳土壺が上げられる。伊達領地に見られる特徴的な形態であり、山城の調査によても出土している。焙烙から発展したとすれば器高の低いタイプが古いものと理解される。従って今回の調査区からは両者の形態が認められ中世の初期は長井時代からと言えよう。ただし、二の丸の堀が大規模に掘られたのは前述した年代である。二の丸の堀を構築する以前に集落跡が存在したと言える。本丸の場所については大規模な発掘調査は行われておらず、正確にはいえないが、二の丸と同様な中世期の



第126図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (1)



第127図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図（2）



第128図 米沢城東二の丸跡出土遺物実測図 (3)

遺構が予想される。問題点は上杉入部以前には、どの程度城郭として整備されていたかである。

◎近世

各時期の絵図によって様相を知ることができる。それを示したのが第130図と第131図である。第131図は米沢城東二の丸調査区と寛永年間の絵図を重ねたものである。堀跡の幅で合わせて作成した。絵図面には寺の場所は示しておらず、寺院名だけが列記してある。

この絵図と検出した遺構を照合し、想定した図であり、この時期に相当する遺構を砂目のスクリントーンで示した。この図を元に述べると堀は石組水路東側で止まり、東側に二の丸東城門を設置している。角柱列は石組水路及び堀跡西側に沿って構築されていたことがわかる。この施設で囲まれ空間に3寺院配置されていたことが絵図面からわかる。それを示すのがZY2・ZY3の礎石建物跡である。北方から大乗寺・安養院・寶藏寺、西方に教王院の4カ寺が調査区に配置されていたことになる。

この配置は創建時期から大乗寺が焼失する延宝2年(1674)まで続くと想定される。次に示した第130図は享和2年(1802)の寺院配置に調査区を重ねたものである。スクリントーンのドットで示したのが土壘部分である。この時期になると寺院の下図は10カ寺に増加している。北方から教王院・明院・蓮藏院・大乗寺・善性院・安養院・弥勒院・万秀院・法性院・寶藏寺が名をつらねている。

今回の調査において、これらの建物跡と認識できたものはなかったが、深く掘り込まれた土壘群がこれらの建物跡の存在を裏づけていると推測される。DY1は大乗寺の東側に構築された土壘である。覆土からは18世紀を中心とする遺物が焼成を受けた状況で出土している。文献によれば天和元年(1674)には藏王堂、元禄6年(1693)に金剛寺、元禄15年(1702)に再度大乗寺が焼失している。廃棄された遺物や重複する土壘はこれらの火災のあとかたづけのたびに掘られた結果と考えることができる。

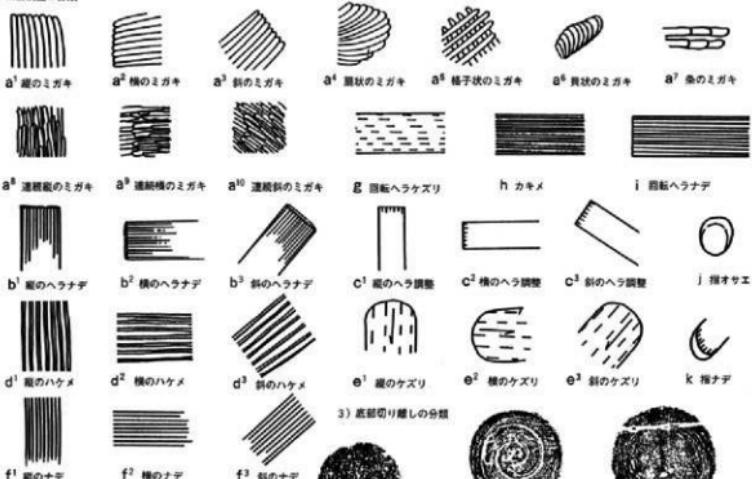
19世紀代の寺院跡と検出遺構が符号しないのは、火災の度に土を盛土して整地したことにより、現地表面と変わらない表土となった。その後、明治4年以降の大変革による事業は寺院跡をあとかたもなく撤去してしまった歴史がうかがえる。堀跡もその時代を反映しており、埋土に見ることができる。最後に遺物について述べる。

遺物を用途別に見てみると台所用具が圧倒的に多い。内訳は煮沸用具、食器用具が上げられる。寺院が住居もかねていたことを裏づけられる資料と言える。他に特徴的なものは茶道具や仏具が認められる。この2形態は東二の丸跡以外では現段階では出土しておらず、城下町の中心地ならではの遺物といえよう。

戸長里窯製品も14点出土しているので少し触れておきたい。中世から近世の変わり目に位置すると考えられる窯跡であり、操業時期の結論がでていない謎の多い窯跡であるが、国立歴史民俗博物館研究報告第73集(1997年3月)の16頁に16世紀後~17世紀初の藩窯と明記してある。伊達・蒲生・上杉と藩主が目まぐるしく変わった時期である。

今回出土した遺物は、摺鉢・大皿・匣鉢・香炉?・中鉢の器形が認められた。すべて少破片で占められる。二次焼成を受けた痕跡を有する。摺鉢は使用による磨滅が観察される。

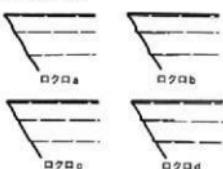
1) 土器調整の分類



3) 底面切り離しの分類



2) ロクロ底形の分類



ロクロ a 水引ロクロの縦縫が 1.5 m 未満
ロクロ b 水引ロクロの縦縫が 1.5 m 以上
ロクロ c 水引ロクロの凹縫が 1.5 m 未満
ロクロ d 水引ロクロの凹縫が 1.5 m 以上

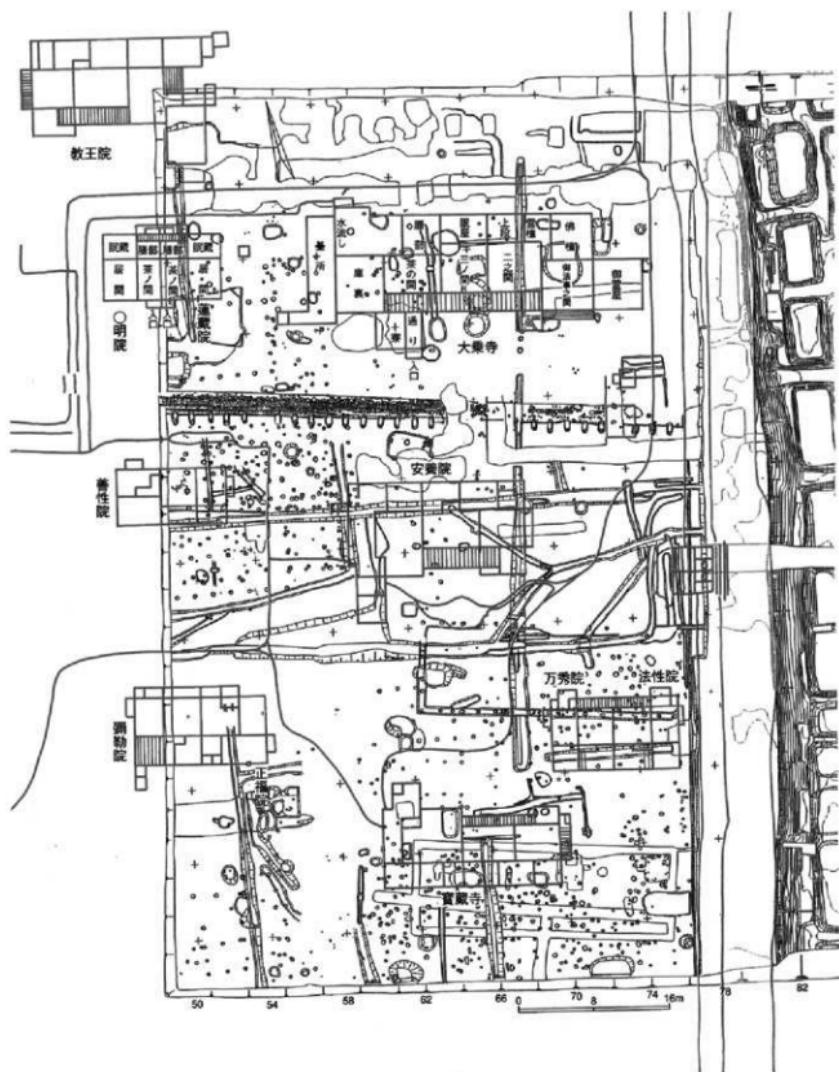
回転ヘラ切り手持ちヘラケズリ調整 A 回転ヘラ切り両ヘラケズリ調整 B



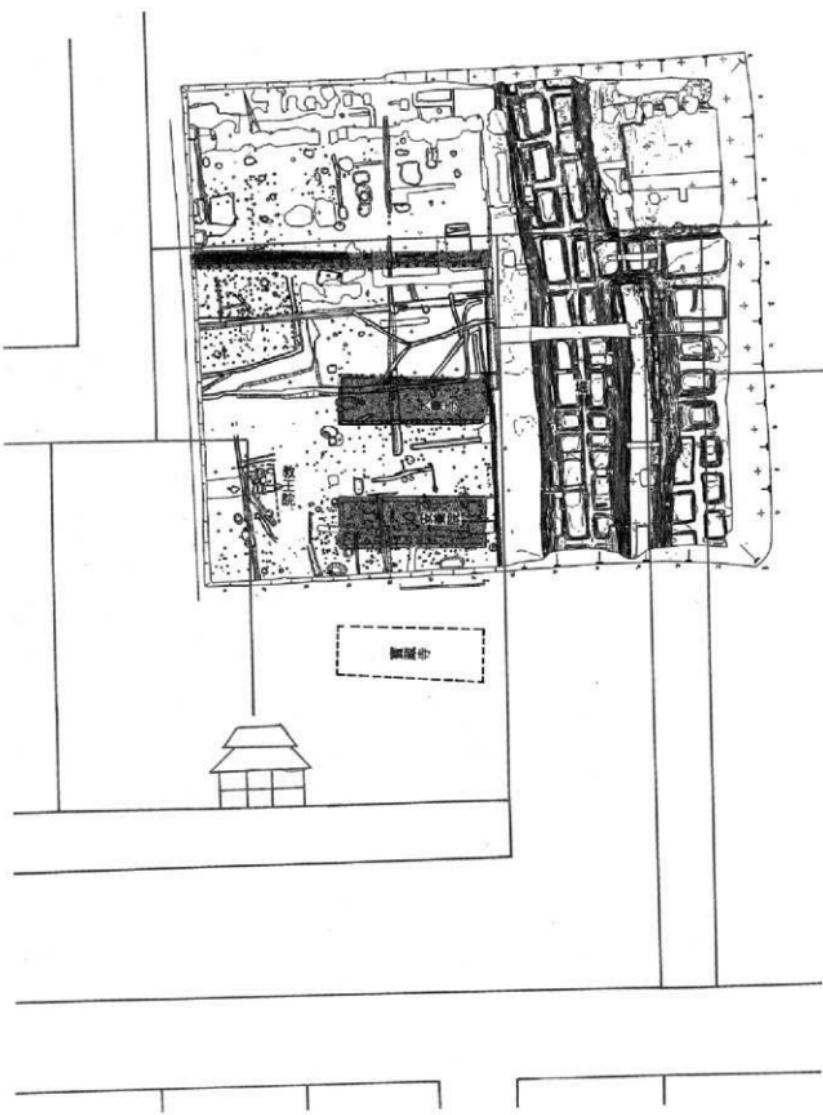
4) 神え目・押え目分類



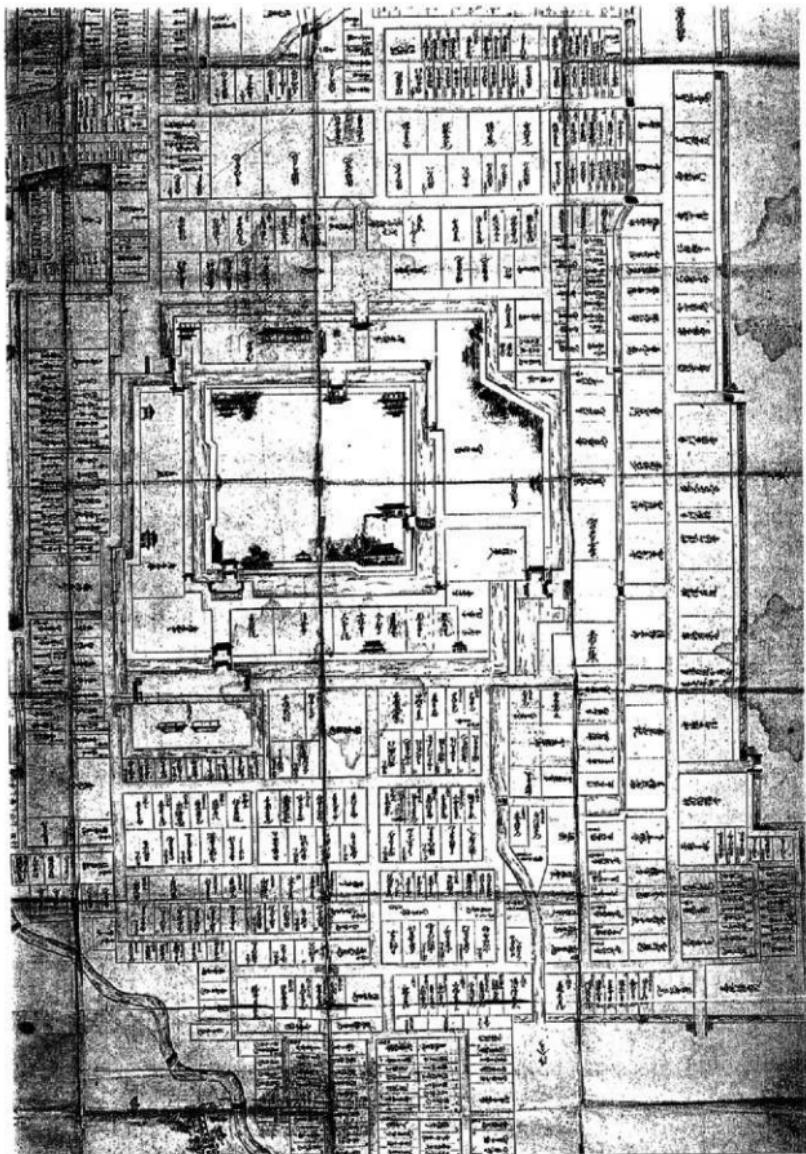
第 129 図 土器調整手法分類図



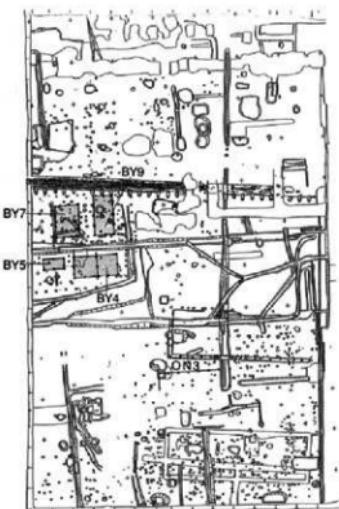
第130図 米沢城東二の丸跡調査区寺院配置図 1802年（享和2年）松岬城塙図から作成



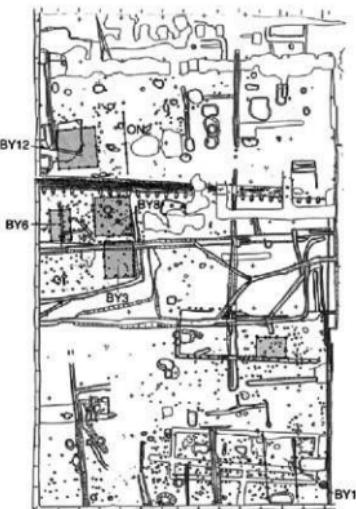
第131図 米沢城東二の丸跡調査区寺院配置想定図（寛永年間） ※赤線は絵図面を示す



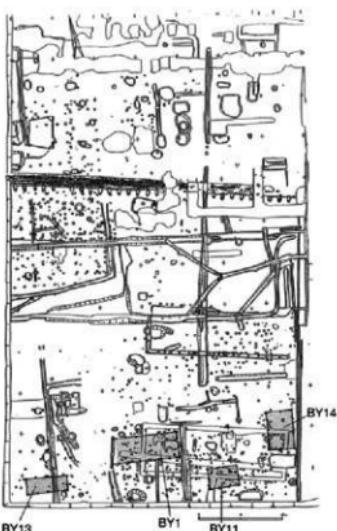
第132図 往古御城下絵図(写) 寛永年17年 上杉氏藏



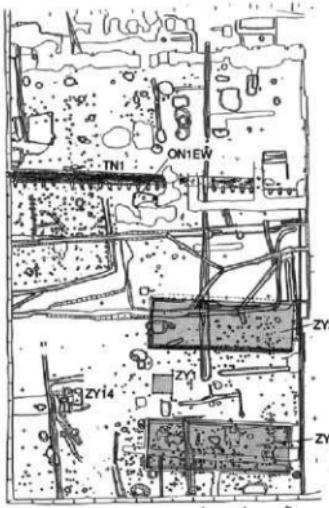
I期 BY7.9.5.4



II期 BY12.16.8.3.2



III期 BY13.1.11.14



IV期 ZY2.4.ON1.TN1.ON2

第133図 米沢城東二の丸跡建物変容図

第1表 米沢城東二の丸跡出土土師器・須恵器観察表

通し No.	出土地区	挿図No.	口径	器高	底径	外面調整	内面調整	底部切り離し調整	備 考
1	KY 33	第50図 1	23.8	(33)	—	e 1	c 1 + c 2		土師器壺
2	DY 63	第50図 2	20.8	—	—	i	i		須恵器壺
3	G 52 - 74	第50図 3	11.2	—	—	i	i		須恵器壺
4	G 58 - 82	第51図 1	—	—	—	g + i	i		須恵器蓋
5	G 58 - 82	第51図 2	—	—	16.3	i	i		須恵器蓋
6	G 70 - 54	第51図 3	—	—	5.5	i	i		須恵器高台坏
7	KY 36	第51図 4	—	—	7.9	i	i	A	須恵器坏
8	G 50 - 70	第51図 5	—	—	8.3	i	i	A	須恵器坏
9	G 50 - 70	第51図 6	—	—	7.8	i	i	A	須恵器坏
10	G 58 - 90	第52図 1	—	—	—	i	i		須恵器壺片
11	G 66 - 74	第52図 2	—	—	—	i	i		須恵器壺片
12	G 50 - 70	第52図 3	—	—	—	i	i		須恵器壺片
13	KY 26 - 3	第52図 4	—	—	—	i	i		須恵器壺片
14	G 54 - 74	第52図 5	—	—	—	i	i		須恵器壺片
15	DY 36	第52図 6	—	—	—	i	i		須恵器壺片
16	DY 48	第52図 7	—	—	—	i	i		須恵器壺片
17	G 58 - 74	第52図 8	—	—	—	i	i		須恵器壺片
18	G 54 - 74	第52図 9	—	—	—	A 6	d 2 + d 3		須恵器壺片
19	DY 48	第52図 10	—	—	—	i	i		須恵器壺片
20	KY 32	第52図 11	—	—	—	i	i		須恵器壺片
21	KY 19 - 11	第52図 12	—	—	—	B 5	A 3		須恵器壺片
22	G 54 - 86	第52図 13	—	—	—	A 6	d 2 + d 3		須恵器壺片
23	G 58 - 86	第52図 14	—	—	—	A 6	d 2 + d 3		須恵器壺片
24	DY 48	第52図 15	—	—	—	C 2	C 2		須恵器壺片
25	G 50 - 82	第52図 16	—	—	—	i	i		須恵器壺片
26	DY 43	第52図 17	—	—	—	i	i		須恵器壺片
27	G 66 - 86	第52図 18	—	—	—	B 7	i		須恵器壺片
28	G 50 - 70	第52図 19	—	—	—	i	d 2 + d 3		須恵器壺片
29	DY 82	第52図 20	—	—	—	d 2 + B 4	d 2 + d 3		須恵器壺片
30	DY 9	第53図 1	—	—	—	B 4	h		須恵器壺片
31	DY 82 - 4	第53図 2	—	—	—	h	h		須恵器壺片
32	KY 11 - 3	第53図 3	—	—	—	h + B 2	h + B 2		須恵器壺片
33	DY 82	第53図 4	—	—	—	B 2	i		須恵器壺片
34	DY 82	第53図 5	—	—	—	i + B 4	i + A 2		須恵器壺片
35	KY 26 - 3	第53図 6	—	—	—	i + A 6	i		須恵器壺片

通し No.	出土地区	挿図No.	口径	器高	底径	外面調整	内面調整	底部切り離し調整	備 考
36	G 50 - 90	第53図 7	—	—	—	i	i		須恵器壺片
37	KY 32	第53図 8	—	—	—	i	i		須恵器壺片
38	G 58 - 50	第53図 9	—	—	—	i	i		須恵器壺片
39	DY 80	第53図 10	—	—	—	i	i		須恵器壺片
40	G 58 - 82	第53図 11	—	—	—	i	i		須恵器壺片
41	G 66 - 74	第53図 12	—	—	—	B 5	i		須恵器壺片
42	DY 82 - 2	第53図 13	—	—	—	i	i		須恵器壺片
43	DY 63	第54図 1	—	—	—	A 6	A 4		須恵器壺片
44	DY 63	第54図 2	—	—	—	i	i		須恵器壺片
45	G 54 - 70	第54図 3	—	—	—	A 2	B 5		須恵器壺片
46	G 70-58	第54図 4	—	—	—	A 2	A 6		須恵器壺片
47	DY 4	第54図 5	—	—	—	A 2	A 6		須恵器壺片
48	G 54 - 74	第54図 6	—	—	—	A 3	A 4		須恵器壺片
49	G 58 - 78	第54図 7	—	—	—	B 5	h		須恵器壺片
50	G 58 - 74	第54図 8	—	—	—	B 5	A 4		須恵器壺片
51	G 54 - 74	第54図 9	—	—	—	B 2	A 2		須恵器壺片
52	G 70 - 58	第54図 10	—	—	—	B 5	h		須恵器壺片
53	DY 21	第54図 11	—	—	—	B 7	A 4		須恵器壺片
54	DY 12	第54図 12	—	—	—	B 7	A 2		須恵器壺片
55	G 70 - 86	第54図 13	—	—	—	B 7	B 7		須恵器壺片
56	G 62 - 82	第54図 14	—	—	—	B 6	A 3		須恵器壺片
57	KY 32	第55図 1	—	—	—	B 5	A 3		須恵器壺片
58	KY 26	第55図 2	—	—	—	B 5	A 2		須恵器壺片
59	G 54 - 74	第55図 3	—	—	—	B 5	A 2		須恵器壺片
60	KY 26	第55図 4	—	—	—	B 6	A 6		須恵器壺片
61	DY 52	第55図 5	—	—	—	B 6	A 3		須恵器壺片
62	DY 80	第55図 6	—	—	—	B 5	A 2		須恵器壺片
63	DY 63	第55図 7	—	—	—	B 6	A 6		須恵器壺片
64	KY 22	第55図 8	—	—	—	B 6	A 7		須恵器壺片
65	G 54 - 74	第55図 9	—	—	—	B 6	A 7		須恵器壺片
66	G 58 - 74	第55図 10	—	—	—	B 6	A 7		須恵器壺片
67	KY 32	第55図 11	—	—	—	B 6	A 7		須恵器壺片
68	KY 32	第56図 1	—	—	—	B 3	i		須恵器壺片
69	KY 26	第56図 2	—	—	—	B 3	i		須恵器壺片
70	54 - 74	第56図 3	—	—	—	B 3	B 3		須恵器壺片

通し No.	出土地区	挿図No.	口径	器高	底径	外面調整	内面調整	底部切り離し調整	備 考
71	KY 26	第 56 図 4	—	—	—	B 5	i		須恵器壺片
72	KY 26	第 56 図 5	—	—	—	i	i		須恵器壺片
73	DY 82	第 56 図 6	—	—	—	A 3	i		須恵器壺片
74	KY 19	第 56 図 7	—	—	—	A 6	A 2		須恵器壺片
75	KY 11 - 5	第 56 図 8	—	—	—	B 6	A 2		須恵器壺片
76	DY 48	第 56 図 9	—	—	—	i	A 3		須恵器壺片
77	DY 72	第 56 図 10	—	—	—	i	i		須恵器壺片
78	DY 48	第 56 図 11	—	—	—	B 6	i		須恵器壺片
79	DY 54	第 56 図 12	—	—	—	B 6	i		須恵器壺片
80	DY 82 - 2	第 56 図 12	—	—	—	B 7	i		須恵器壺片
81	DY 20	第 57 図 1	—	—	—	B 4	i		須恵器壺片
82	DY 20	第 57 図 2	—	—	—	B 4	i		須恵器壺片
83	DY 82 F	第 57 図 3	—	—	—	A 6	i		須恵器壺片
84	KY 32	第 57 図 4	—	—	—	A 6	A 2		須恵器壺片
85	G 54 - 66	第 57 図 5	—	—	—	B 7	A 2		須恵器壺片
86	KY 26	第 57 図 6	—	—	—	B 7	A 2		須恵器壺片
87	G 66 - 74	第 57 図 7	—	—	—	A 6	i		須恵器壺片
88	KY 32	第 57 図 8	—	—	—	A 6	A 2		須恵器壺片
89	KY 8 - 7	第 57 図 9	—	—	—	B 7	A 2		須恵器壺片
90	DY 82 - 3	第 57 図 10	—	—	—	i	A 6		須恵器壺片
91	KY 26	第 57 図 11	—	—	—	A 6	A 1		須恵器壺片
92	G 66 - 94	第 57 図 12	—	—	—	A 6	b 2 + b 3		須恵器壺片
93	DY 14	第 57 図 13	—	—	—	A 6	A 2		須恵器壺片
94	G 58 - 78	第 58 図 1	—	—	—	A 6	A 2		須恵器壺片
95	KY 8	第 58 図 2	—	—	—	A 6	A 2		須恵器壺片
96	DY 62	第 58 図 3	—	—	—	A 6	A 2		須恵器壺片
97	G 70 - 78	第 58 図 4	—	—	—	A 6	A 2		須恵器壺片
98	G 58 - 80	第 58 図 5	—	—	—	A 6	A 2		須恵器壺片
99	DY 80	第 58 図 6	—	—	—	A 3	A 2		須恵器壺片
100	G 50 - 74	第 58 図 7	—	—	—	i	i		須恵器壺片
101	G 58 - 82	第 58 図 8	—	—	—	A 6	A 2		須恵器壺片
102	DY 63	第 58 図 9	—	—	—	A 6	A 2		須恵器壺片
103	KY 28	第 58 図 10	—	—	—	A 6	A 2		須恵器壺片
104	G 58 - 70	第 58 図 11	—	—	—	A 5	A 3		須恵器壺片
105	DY 82	第 58 図 12	—	—	—	A 6	A 2		須恵器壺片

通し No.	出土地区	挿図No.	口径	器高	底径	外面調整	内面調整	底部切り離し調整	備 考
106	G 62 - 78	第 58 図 13	—	—	—	A 6	A 1		須恵器壺片
107	KY 8 - 6	第 58 図 14	—	—	—	A 3	A 3		須恵器壺片
108	DY 62	第 58 図 15	—	—	—	A 6	A 1		須恵器壺片
109	G 58 - 74	第 59 図 1	—	—	—	A 6	A 3		須恵器壺片
110	G 58 - 90	第 59 図 2	—	—	—	A 6	A 2		須恵器壺片
111	KY 19 - 8	第 59 図 3	—	—	—	A 3	A 2		須恵器壺片
112	G 58 - 74	第 59 図 4	—	—	—	B 7	A 2		須恵器壺片
113	KY 19 - 10	第 59 図 5	—	—	—	A 6	A 2		須恵器壺片
114	G 52 - 74	第 59 図 6	—	—	—	A 6	A 4		須恵器壺片
115	KY 32	第 59 図 7	—	—	—	A 6	A 2		須恵器壺片
116	KY 17	第 59 図 8	—	—	—	B 7	A 2		須恵器壺片
117	G 54 - 82	第 59 図 9	—	—	—	B 7	A 2		須恵器壺片
118	DY 80	第 59 図 10	—	—	—	B 7	A 2		須恵器壺片
119	G 62 - 90	第 59 図 11	—	—	—	B 7	A 5		須恵器壺片
120	KY 19 - 7	第 59 図 12	—	—	—	B 7	A 2		須恵器壺片
121	G 50 - 70	第 59 図 13	—	—	—	A 3	A 2		須恵器壺片
122	DY 80	第 59 図 14	—	—	—	A 3	A 2		須恵器壺片
123	KY 11 - 3	第 60 図 1	—	—	—	A 5	A 2		須恵器壺片
124	G 62 - 680	第 60 図 2	—	—	—	B 11	B 7		須恵器壺片
125	G 54 - 82	第 60 図 3	—	—	—	A 6	h		須恵器壺片
126	KY 8 - 7	第 60 図 4	—	—	—	A 3	A 2		須恵器壺片
127	DY 82 - 1	第 60 図 5	—	—	—	A 2	h		須恵器壺片
128	KY 33	第 60 図 6	—	—	—	A 6	A 2		須恵器壺片
129	G 62 - 40	第 60 図 7	—	—	—	A 6	A 2		須恵器壺片
130	KY 10 - 9	第 60 図 8	—	—	—	d 2 + A 5	D 2 + D 3		須恵器壺片
131	G 54 - 24	第 60 図 9	—	—	—	A 6	A 2		須恵器壺片
132	KY 32	第 60 図 10	—	—	—	B 7	B 5		須恵器壺片
133	G 58 - 82	第 60 図 11	—	—	—	A 6	A 2		須恵器壺片
134	G 50 - 74	第 60 図 12	—	—	—	A 6	A 2		須恵器壺片
135	KY 19 - 10	第 60 図 13	—	—	—	A 6	B 4		須恵器壺片
136	G 66 - 94	第 60 図 14	—	—	—	A 6	i		須恵器壺片
137	DY 48	第 60 図 15	—	—	—	A 6	A 2		須恵器壺片
138	KY 26	第 60 図 16	—	—	—	B 7	A 4		須恵器壺片

第2表 米沢城東二の丸跡出土 瓦器類観察表

通し No.	出土地区	押図No.	口径	器高	底径	備 考
139	KY 8 - 2	第61図 1	31.2	13.2	11.2	摺鉢
140	G 70 - 86	第61図 2	28.2	—	—	摺鉢
141	KY 26	第61図 3	27.8	—	—	摺鉢
142	DY 89	第61図 4	28.4	—	—	摺鉢
143	G 54 - 58	第62図 1	35.9	—	—	摺鉢
144	DY 80	第62図 2	34.8	11.8	13.2	摺鉢
145	G 70 - 58	第62図 3	30.0	8.3	14.8	摺鉢
146	KY 19 - 10	第63図 1	29.2	12.1	8.9	摺鉢
147	KY 33 F	第63図 2	30.0	9.0	(13.8)	摺鉢
148	KY 37	第63図 3	34.2	13.8	23.0	内耳土壙
149	G 54 - 90	第64図 1	30.8	—	—	内耳土壙
150	G 54 - 62	第64図 2	—	—	—	内耳土壙
151	G 70 - 86	第64図 3	—	—	—	内耳土壙
152	G 50 - 58	第64図 4	—	—	—	内耳土壙
153	G 58 - 90	第65図 1	—	—	—	内耳土壙
154	KY 33	第65図 2	—	—	—	内耳土壙
155	G 50 - 78	第65図 3	—	—	—	内耳土壙
156	KY 20 - 1	第65図 4	—	—	—	内耳土壙
157	G 70 - 54	第65図 5	—	—	—	内耳土壙
158	G 58 - 78	第66図 1	—	—	—	内耳土壙
159	G 50 - 50	第66図 2	—	—	—	内耳土壙
160	KY 11	第66図 3	—	—	—	内耳土壙
161	KY 33	第66図 4	—	—	—	内耳土壙
162	KY 11	第66図 5	—	—	—	内耳土壙
163	KY 33	第67図 1	—	—	—	内耳土壙
164	KY 33	第67図 2	—	—	—	内耳土壙
165	KY 8 - 7	第67図 3	—	—	—	内耳土壙
166	KY 33	第67図 4	—	—	—	内耳土壙
167	NN 2	第67図 5	—	—	—	黒色壺
168	KY 8 - 2	第67図 6	—	—	—	黒色壺
169	KY 11-3	第67図 7	—	—	—	手焙の足?
170	G 70-82	第67図 8	—	—	—	土風呂
171	G 70-78	第67図 9	—	—	—	土風呂
172	DN 2	第68図 1	—	—	—	手焙
173	DY 82 F	第68図 2	—	—	—	手焙

通し No.	出土地区	挿図No.	口径	器高	底径	備考
174	G 50 - 94	第68図3	—	—	—	手焙
175	KY 34	第68図4	—	—	—	手焙
176	G 50 - 94	第69図1	—	—	—	瓦器質筒形土器
177	KY 19 - 10	第69図2	—	—	—	瓦器質小型皿
178	KY 33	第69図3	—	(15.3)	10.3	瓦器質壺形土器
179	KY 34	第69図4	—	—	—	瓦器質筒形器
180	G 58 - 22	第69図5	—	(8.1)	21.0	瓦器質壺形土器
181	G 62 - 90	第69図6	—	—	—	瓦器質筒形土器
182	G 54 - 54	第70図1	—	—	—	瓦器質大型壺形土器
183	DY 63	第70図2	—	—	—	瓦器質大型漆塗壺形土器
184	KY 37	第70図3	—	—	—	七厘
185	KY 19 - 1	第71図1	—	—	—	手焙
186	KY 11-7	第71図2	—	—	—	浅鉢形手焙
187	KY 5	第71図3	24.3	19.3	27.7	火鉢(七厘)

第3表 米沢城東二の丸跡出土陶磁器観察表

通し No.	出土地区	挿図No.	口径	器高	底径	備考
188	KY 11 - 5	第72図1	20.5	—	—	在地窯 13C末~14C 四耳付壺
189	DY 1	第72図2	18.3	10.4	11.0	近世 三脚香炉 窯不明
190	DY 1	第72図3	20.1	9.9	13.7	本郷窯? 近世
191	DY 63	第73図1	39.4	—	—	越前窯 17C 大甕
192	DY 49	第73図2	14.5	—	—	信楽 16C~17C 茶壺
193	DY 1	第74図1	14.5	22.1	18.8	瀬戸 近世 お茶道具 水差し
194	DY 1	第74図2	16.9	(20.4)	—	岸窯? 近世 お茶道具 水差し
195	G 70 - 86	第75図1	—	—	—	成島焼 江戸末 壺
196	G 66 - 78	第75図2	28.4	15.2	11.2	成島焼? 近世 鉢
197	DY 1	第76図1	15.5	21.3	12.7	岸窯 江戸? お茶道具 水差し
198	DY 1	第76図2	10.6	11.0	9.0	塙筒 雜器 窯不明
199	DY 1	第76図3	—	—	6.4	窯不明 お茶道具 約たて
200	DY 1	第76図4	12.0	2.7	8.4	水差し蓋 窯不明
201	DY 1	第76図5	15.4	13.3	13.5	唐津か? 近世 双耳水差し お茶道具
202	DY 1	第76図6	20.5	3.1	10.8	瀬戸? 江戸中 皿
203	DY 1	第76図7	—	—	—	岸窯 三脚香炉
204	DY 1	第77図1	10.1	—	—	近世 茶壺 窯不明

通し No.	出土地区	挿図No.	口径	器高	底径	備考
205	G 70 - 82	第77図2	—	—	5.8	窯不明 植木鉢
206	G 50 - 90	第77図3	23.1	—	—	瀬戸 近世 仏具 香炉
207	G 50 - 94	第77図4	17.4	7.5	4.4	近世 鉢 窯不明
208	G 54 - 62	第77図5	9.4	5.1	5.3	香炉 窯不明
209	KY 34	第77図6	—	—	4.6	京焼 近世 茶碗
210	G 70 - 82	第77図7	—	—	4.9	清水鉢
211	G 70 - 82	第77図8	11.6	—	—	植木鉢 窯不明
212	G 58 - 58	第77図9	—	—	4.6	京焼 小皿
213	G 58 - 82	第77図10	—	—	4.7	京焼 近世 小皿
214	G 50 - 78	第77図11	—	—	4.7	京焼 近世 小皿
215	G 58 - 44	第77図12	—	—	3.0	京焼 近世 小皿
216	G 64 - 82	第77図13	—	—	4.3	京焼 近世 小皿
217	KY 19 - 3	第77図14	10.3	2.6	6.8	瀬戸 小皿
218	DY 54	第77図15	9.9	2.3	15.6	瀬戸 16C 小皿
219	KY 11 - 5	第77図16	10.1	2.8	6.8	岸窯 江戸初 小皿
220	KY 8 - 6	第77図17	—	—	5.1	岸窯 灯明皿
221	DY 1	第78図1	9.9	3.0	5.0	岸窯 灯明皿
222	DY 1	第78図2	10.0	2.5	5.6	岸窯 灯明皿
223	DN 2	第78図3	7.9	2.3	6.4	灯明皿 窯不明
224	DY 1	第78図4	10.0	2.7	6.0	岸窯 灯明皿
225	DY 1	第78図5	9.4	2.6	5.2	岸窯 灯明皿
226	G 70 - 78	第78図6	—	—	4.5	窯不明 灯明皿
227	KY 27	第78図7	7.3	4.8	3.6	大堀相馬 仏器 近世
228	G 50 - 90	第78図8	—	—	7.1	窯不明 仏器 近世
229	G 66 - 86	第78図9	2.4	—	—	窯不明 壺
230	G 70 - 82	第78図10	—	—	5.6	相馬？ 花瓶
231	G 70 - 82	第78図11	3.7	4.0	2.4	相馬 小壺 完形
232	G 62 - 82	第78図12	7.0	—	—	備前？ 茶入 茶道具 広口壺
233	G 70 - 82	第78図13	—	—	5.6	唐津 17C初 碗
234	G 66 - 82	第78図14	—	2.0	2.7	窯不明？ 近世 急須蓋
235	G 70 - 86	第78図15	—	2.5	3.9	相馬 近世 急須蓋
236	G 54 - 54	第79図1	8.9	2.7	4.9	瀬戸 16C前半 小皿
237	KY 19	第79図2	9.6	2.3	5.0	瀬戸 16C前半 小皿
238	G 50 - 54	第79図3	—	—	6.2	瀬戸 16C前半 小皿
239	G 54 - 62	第79図4	8.9	2.6	4.8	瀬戸 16C前半 小皿